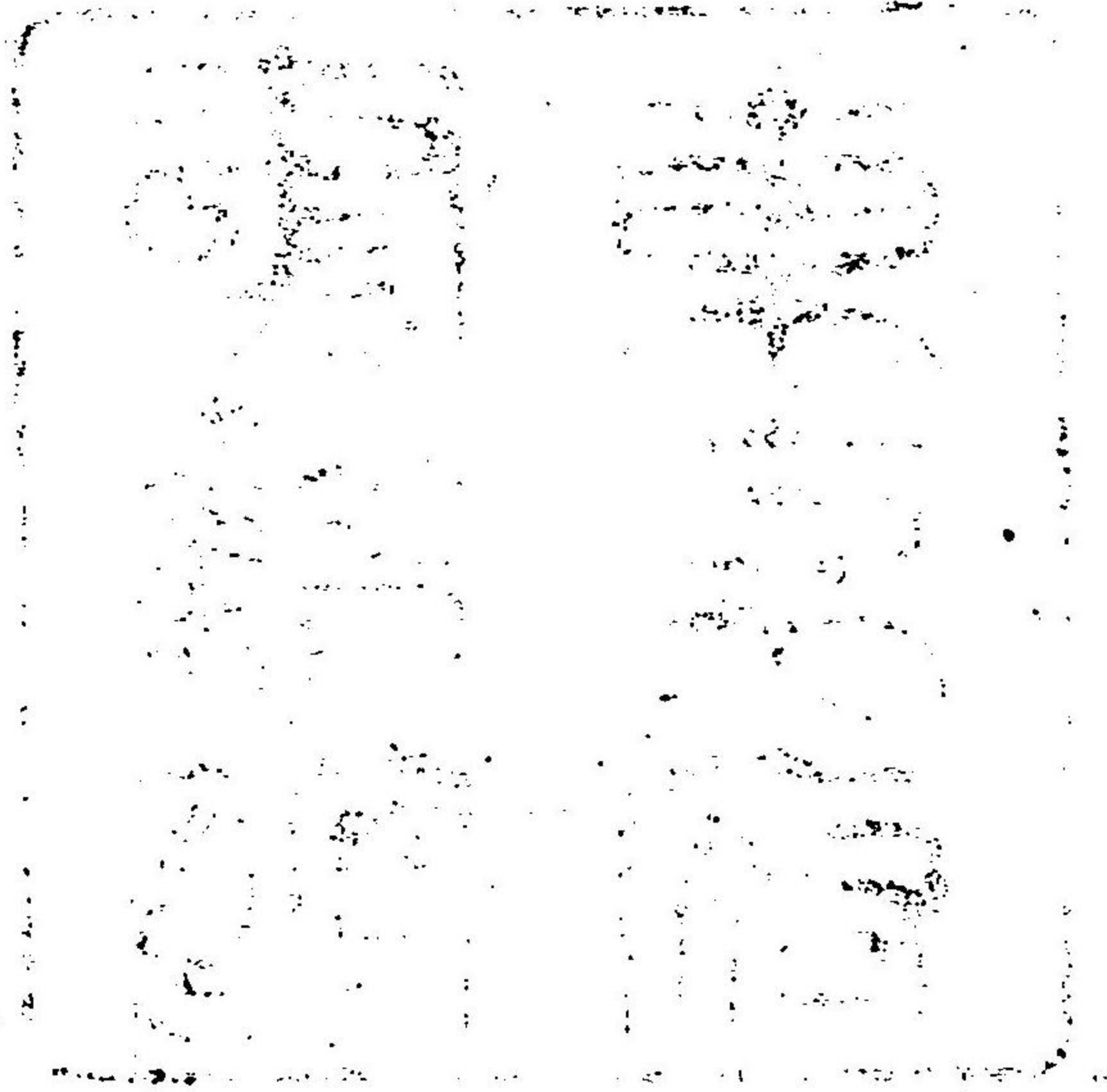


師範學校
小學讀本

特71

491

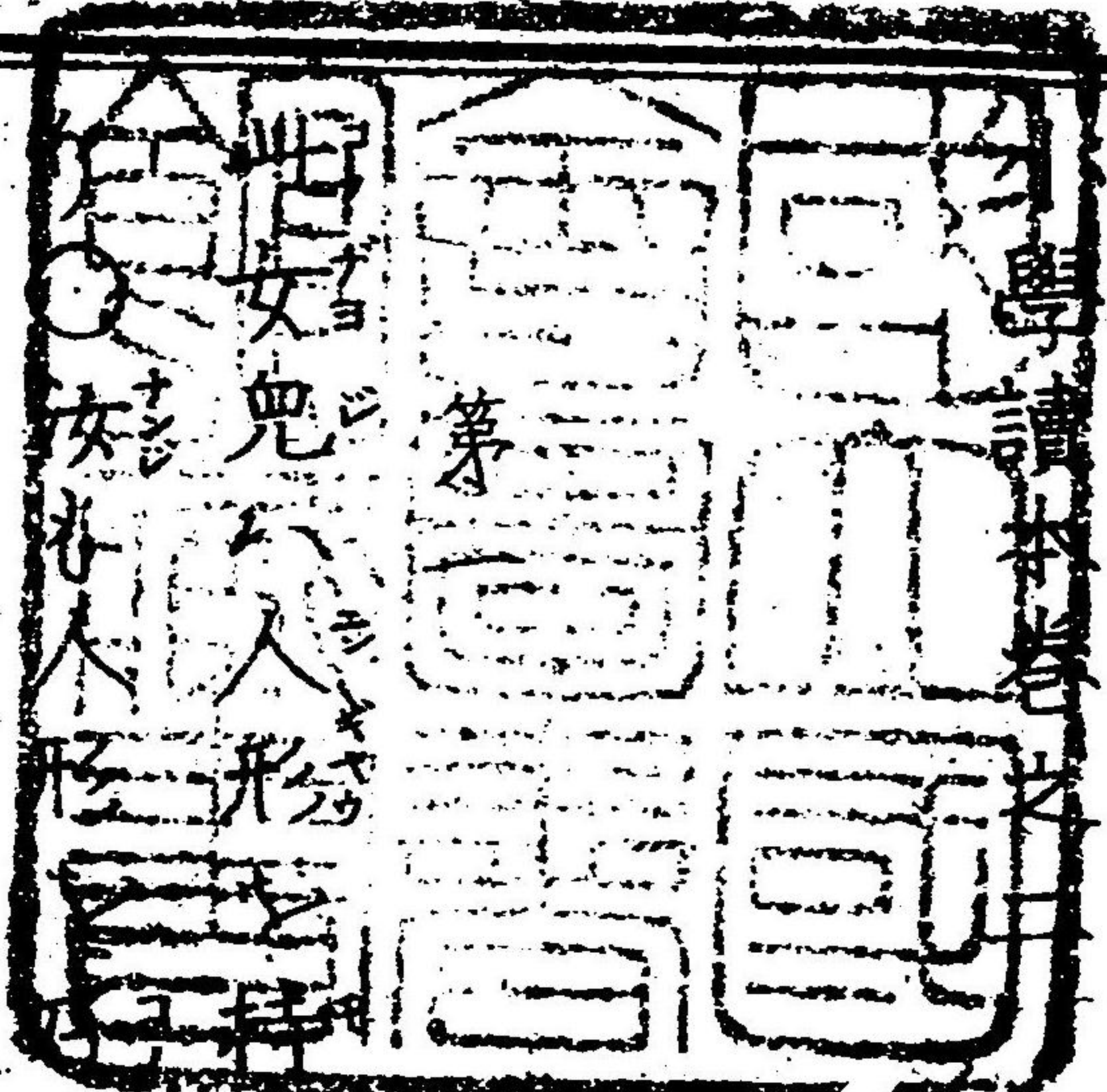


文部省編輯
師範學校

小學讀本

明治七年
八月改正

案風舍藏



わ○我ワも甚シこまマと好コト
めり○此コノ男ヲ兜トも人形ニ
と持テりマ○否イナ男ヲ兜ト
へ人形ヲ持ツとゞて

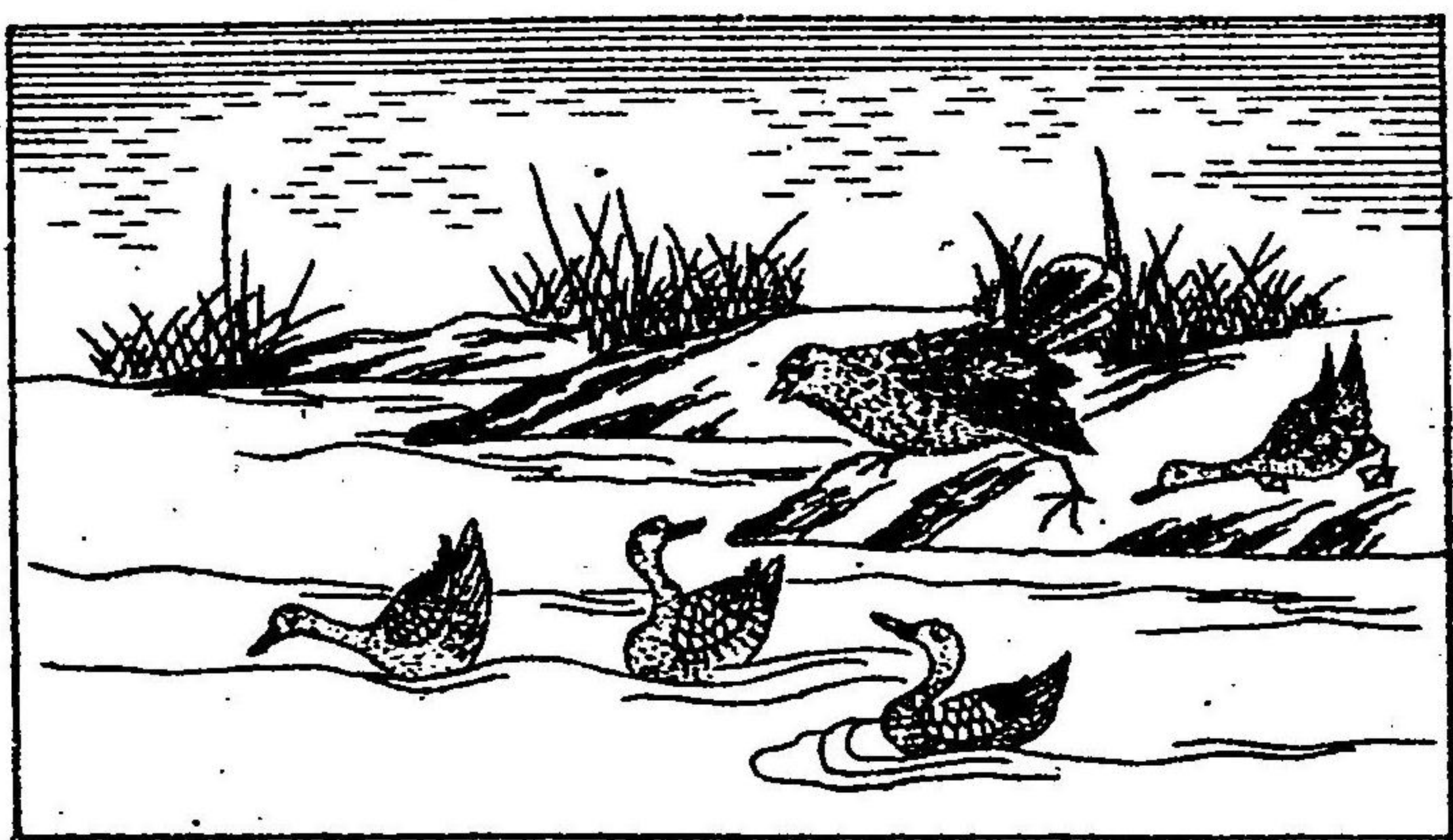
特71
491



田中義康 編輯
那珂通高 校正

52. 6. 9
77W21711

鞭むちと持もてり、男おとこ兎うさぎの遊あそへ女おんな兎うさぎと異ことふままはなり。老おきなたら
牝メ雞ケイ鶩ウの子こと、多おほく伴ともへり。○此コノ鶩ウの子こへ皆みな水ミヅの中なかに飛と



入いり。○此コノ鳥トリへ、其ソノ性セイ水ミヅ上うへに泳およぐこと
と、好このめり。○牝メ雞ケイへ、其ソノ沈シヅみ溺ネきんこと
と、恐おそまて、甚た憂うれひ悲かなめり。○然シカまども鶩ウ
の子こへ、牝メ雞ケイの心ココロを量かり知しらば、て、隨ま
意いま遊あべり。○牝メ雞ケイへ、何なにを憂うれひ悲かなむと
思おもふや。○牝メ雞ケイへ、此コノ鶩ウの游あ水ミヅ鳥トリあると
知しらば、て我われ子こと思おもひ悲かなめるなり。
爰こゝま成な長ながたる鶩ウらり。○鶩ウの嘴くちばしを牝メ雞ケイ

の嘴くちばしより、大おほまゝて其ソノ足あしを蹶たり故ゆゑに、

水みづに入いりて、能よく泳およぐことを得えるあり

此こゝへ、何なに家いえあると知しるなり。○こゝまし、

學ま校がうあるべし。數かず多おほくの男おとこ女おんなの子こ、此こゝ家いえに

通かふを以もて、知しらるなり。○汝なんぢへ、小せう兎うさぎの

遊あ歩ほ場ばへ、出いで、遊あふと、見みたりや。○數かず多おほくの小せう兎うさぎ出いで、

走はるも、あり、球たまごを弄あぶも、あり、或あるは紙かみ鳶とんぼを揚あげ、或あるは輪わを

廻まわして、遊あべり。○男おとこ兎うさぎも、女おんな兎うさぎも、學ま校がうへ、て、能よく勉こ強きやう

を、○能よく勉こ強きやうしたる後のちは、非たがまば、遊あ歩ほを、あるさる

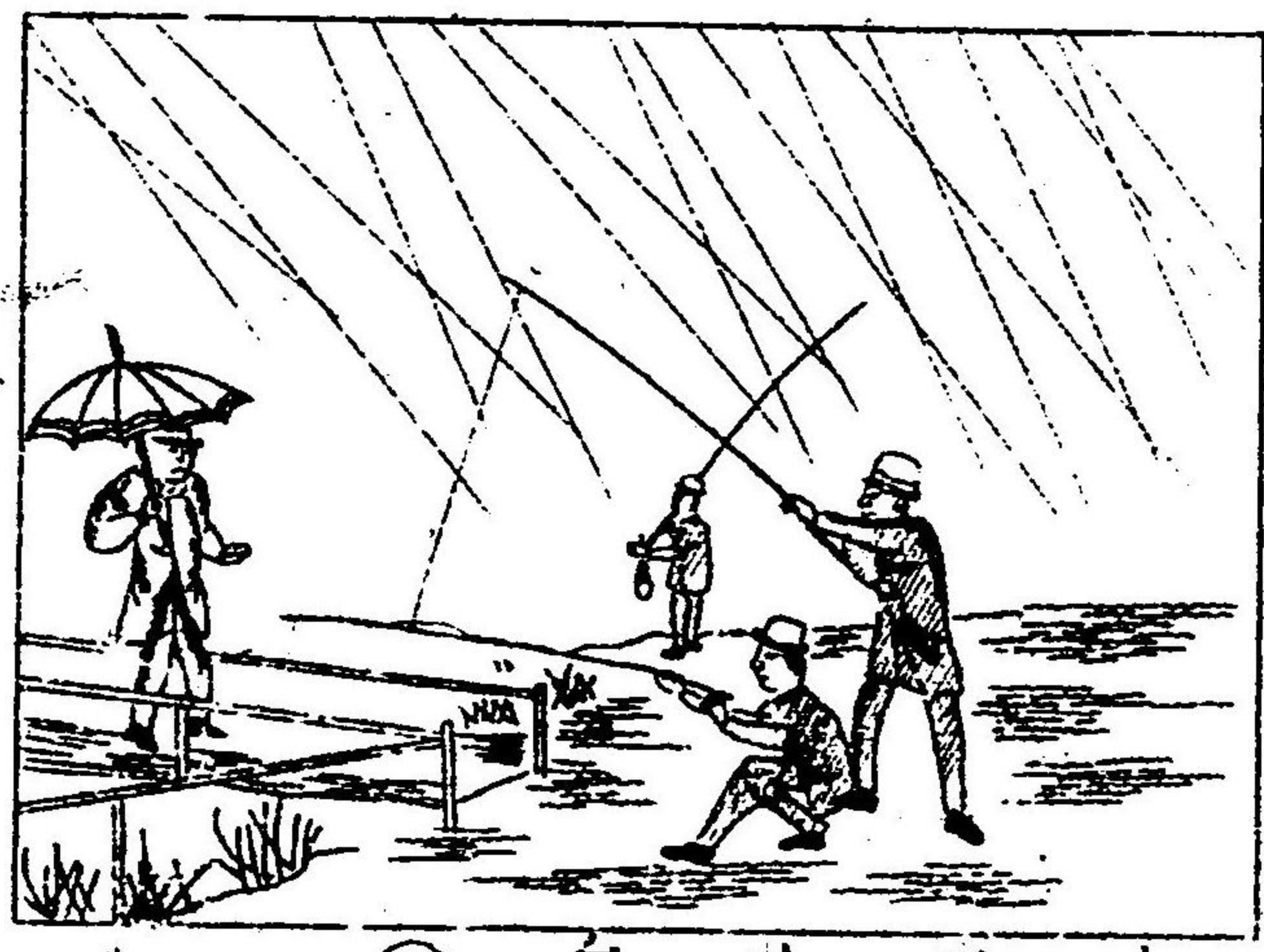
とも、誠まことに、たのしきことへ、あきものあり。今いま此こゝ子この釣つり



たる魚ハ鯉あり○汝も魚を
 釣り得たるときハ能く心を
 用ぬよ釣糸と切らるること
 ありべし○天曇りて雨少
 降り来たり○魚と釣るよハ
 雨天のときと宜しとせらる
 ○然り少く雨降りて風か
 く暖かる日と宜しとせらる○汝
 ハ魚と釣ると以て宜しき事と思ふ
 然り魚と釣り
 て食むハ悪しきことよ
 釣りたる魚と弄



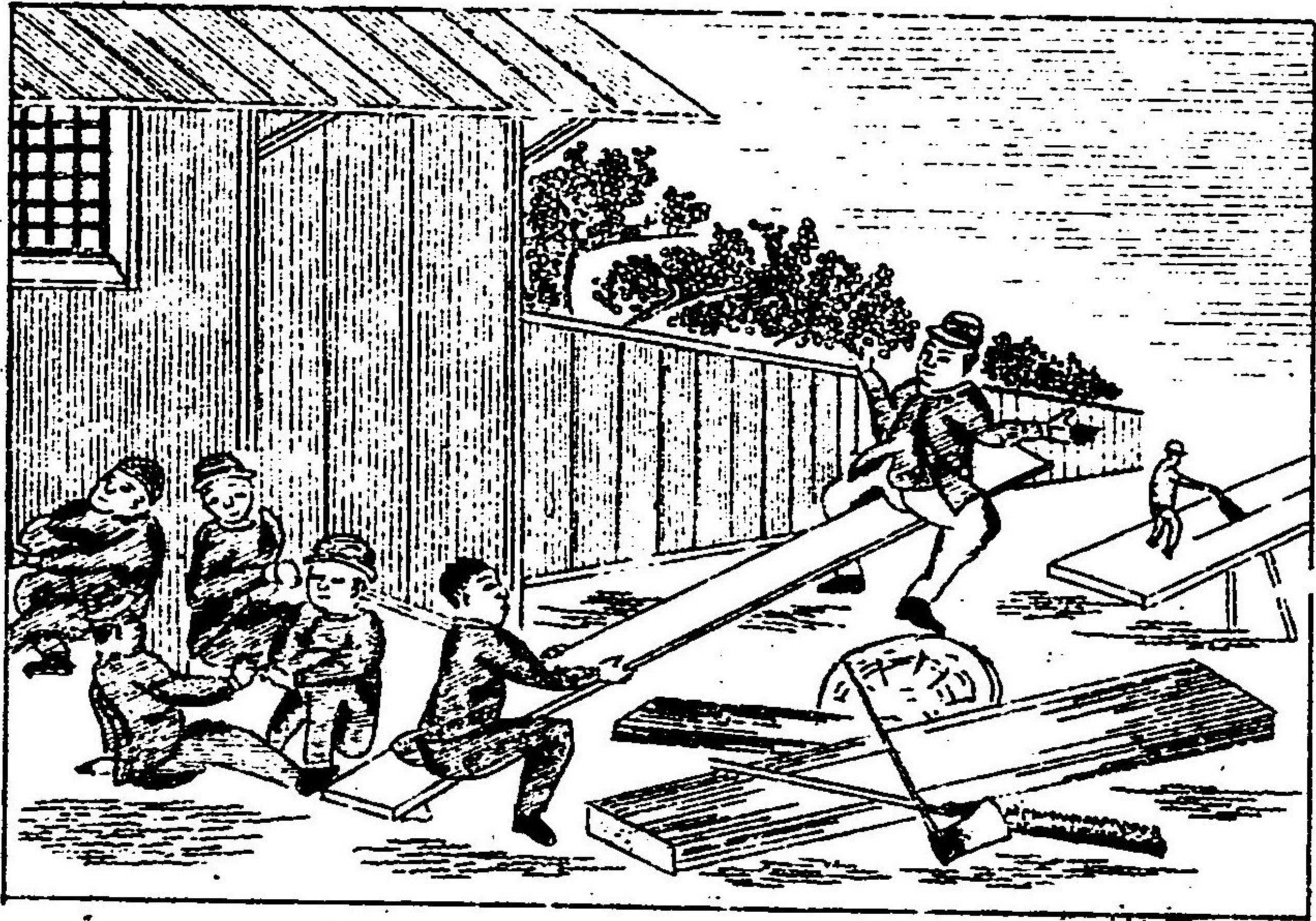
びて徒ら捨つるハ宜し
 と女兎とあり○こまハ學校へ行
 途中ふり○今急きて學校へ行かん
 と思ふのゆゑ
 男兎ハ女兎を助
 けて走きり○此
 兎等ハ學校へ行
 きて學問すること
 一の樂と思ふ
 此馬ハ柔和なる



○然り此兎等ハ其性善きもの
 ハ學校へ行きて學問すること
 一の樂と思ふ
 此馬ハ柔和なる



馬ウマゆゑ二人の小兎ウサギを來キせて歩イめり○此馬ウマを走ハシると思ふ
 〇此馬ウマの前マエの一足ヒトアシを舉アゲげてあとの一足ヒトアシを下サさん
 とするを見ミまハ走ハシるハあつた
 以モ徐コト歩イむ也○前マエの小兎ウサギハ手テ
 綱ツナを兩フタ手テ持モちたまきとも其見ミ
 ゆるハ只右ミドリの半ウチのみあり○後アト
 の小兎ウサギハ馬ウマより落オつることを
 恐オソるハゆゑ前マエの小兎ウサギを抱アき
 てをまきり」
 此處ココハ工人コウジン
 の作ツク事コト場バあり○數タビ多タの大人オトナへ



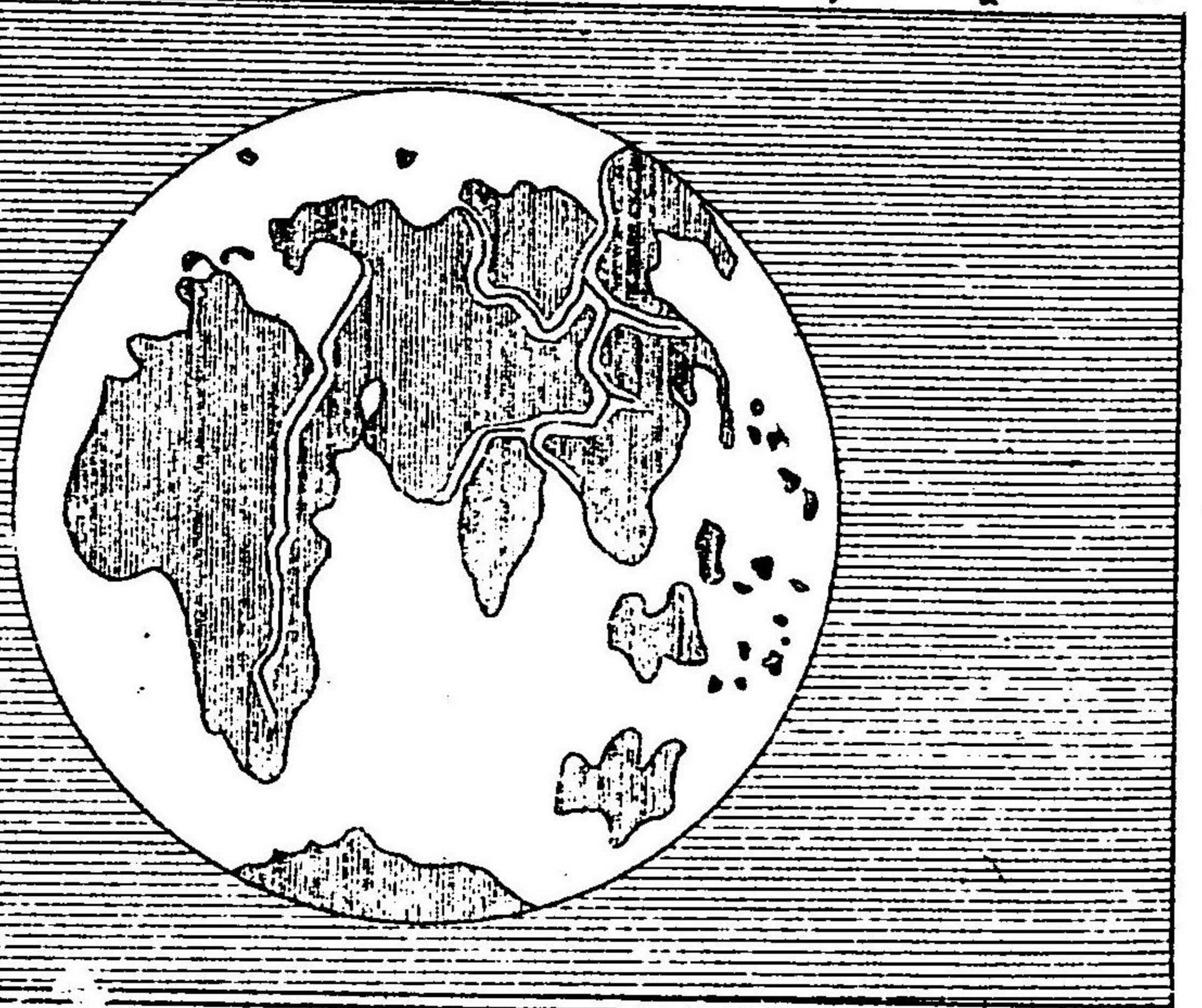
さく事コトと事コトとせり○二人の小兎ウサギハ此作ツク事コト場バよ來キり板イタ
 よ來キりて遊アソび戯オモき居イまり一人
 の小兎ウサギハ高タカく上ウり一人ハ低ヒ
 く下シりたり○汝キミハ小兎ウサギの傍カタ
 よある器モノを何ナニありと思ふや○
 こまハ斧ノコギリと鋸ノコギリあり○汝キミハ此小
 兎等ウサギを善ヨクき小兎ウサギと思ふ○作
 事コト場バに來キりて遊アソふハ善ヨクき小兎
 一ヒトハあつたるべし○今ハ遊アソ歩ホ
 をへき時トキ開キとハ見ミえ以モ學ガク問モンを

べき時間なり○學問をべき時間に作事場よ来りて遊
び戯き作事の妨とせむるハ心ちつき小鬼なり○汝等ハ
遊歩のときも作事場よ来るへうらに遊歩場よて遊ふ

第二

我等の住居をる世界ハ平なるものよりなり實ハ圓く
して球の如きものなり故に世界を地球といふ○此世
界ハ一づうふるやうに覺ゆまども實ハ動くものよて
毎日一廻づつ旋りて一年ハ太陽の周りを一旋りを
るものなり○太陽ハ圓き物よて世界ハ光と熱とを與
ふるものなり○我等ハ見るハたいよろと見まとも夜ハ

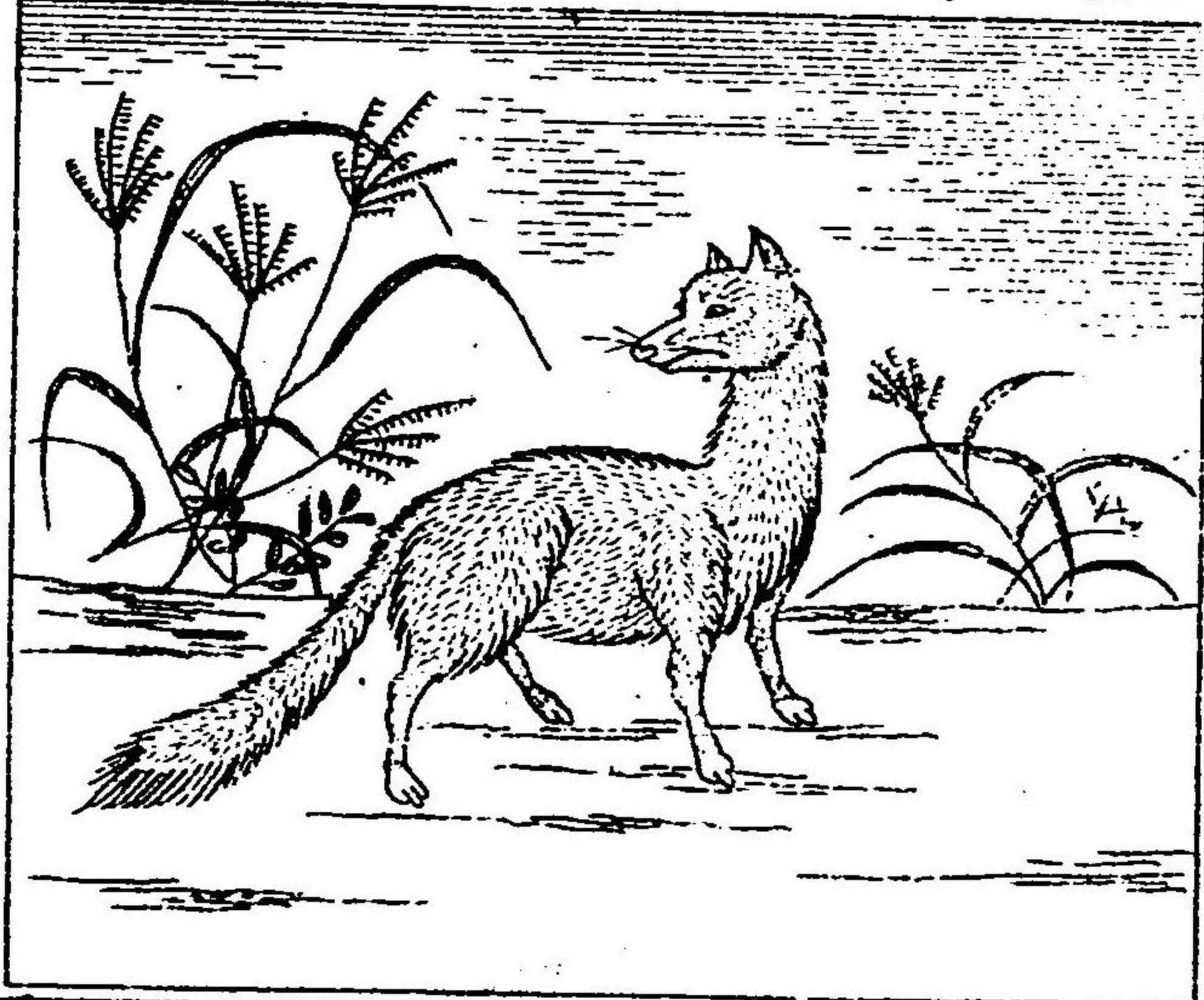
見ることなり○汝夜は太陽と
見ることを得ざるハ何ゆゑな
ると知りや○夜ハ太陽の方
く向しさうゆるく見ることと
得ざるなり○月も亦圓きも乃
これとも太陽及地球の如く
大なり○月ハ原より光なき
ものなきども太陽の光を受け
て始めて輝くものなり
我等一同に草刈場よ出来ま

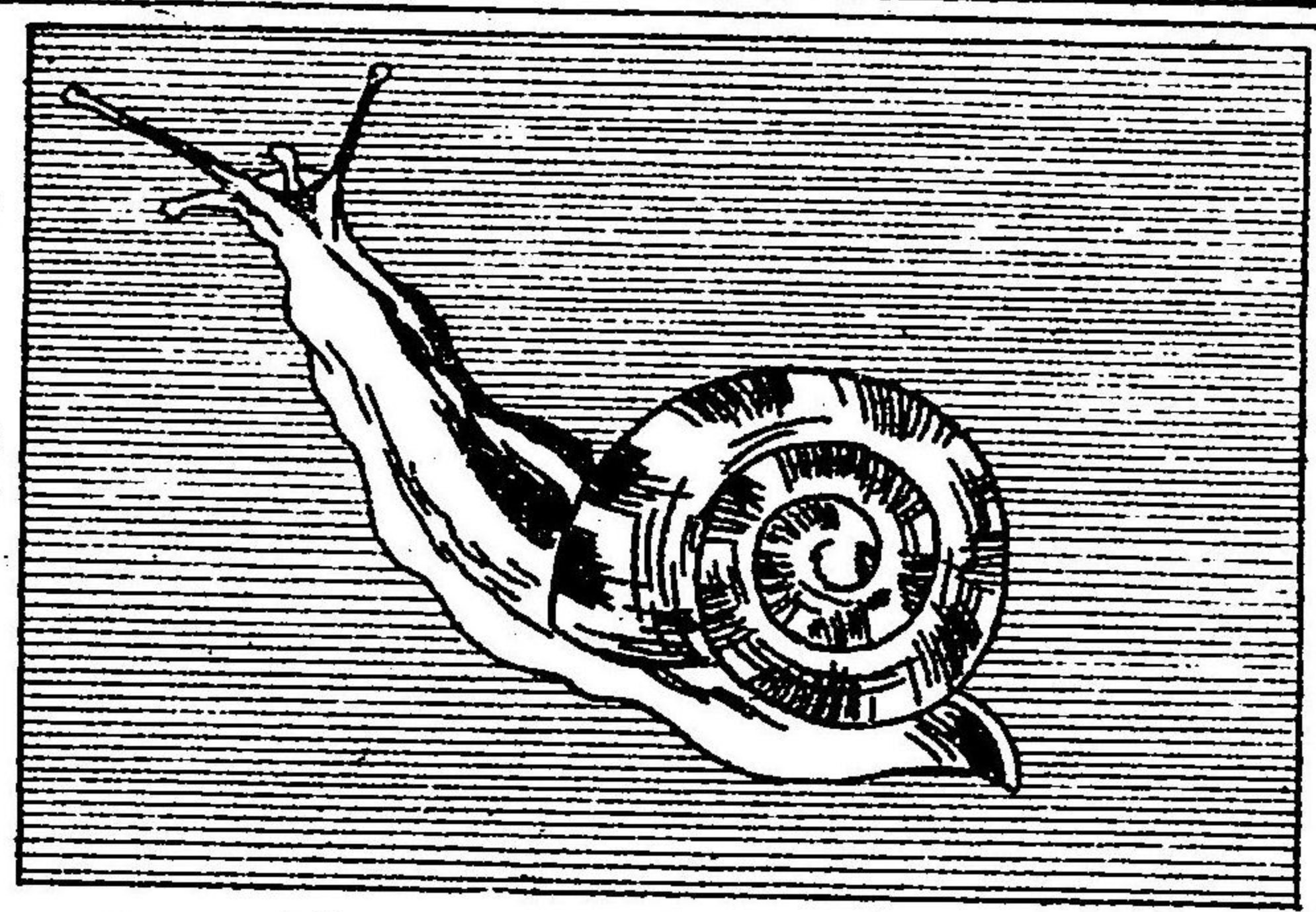


○小免の刈りたる草の上へ坐
 く居て草を刈るを觀る○枯草
 へ柔なる物なまは此上へ遊む
 戯るゝ宜しきなり○草へ牛
 馬の食なりゆゑに牛馬を畜ふ
 家までハ夏の間、刈りてこま
 を貯ふ狐へ、犬も似たる獸も
 て、頭平く鼻と耳とへ、尖りて尾
 へ甚長く○此獸へ、穴の中へ住
 る入まば穴より出でて、田畠の
 傍を遊行たり○狐へ食を



貪る獸もして多く雞の雛を食ひ、又好きて桑の實櫻の
 實等を食ふ○雞を捕ふまば、穴へ持ち行きて、こまを食
 ふ○もし、犬を見ると、ときへ穴の中へ逃げ入りて、出
 ことなり是へ穴へ入りまば、直
 る犬齒を殺さるゝ故なり蝸牛
 といふ蟲へ、足なきゆゑに、歩むこ
 と能く、只匍匐するのくなりこ
 の蟲へ、背の上へ敷けりて物と恐
 るゝときへ、其中へ縮こまる○蝸
 牛の動くときへ、四本の角を出た



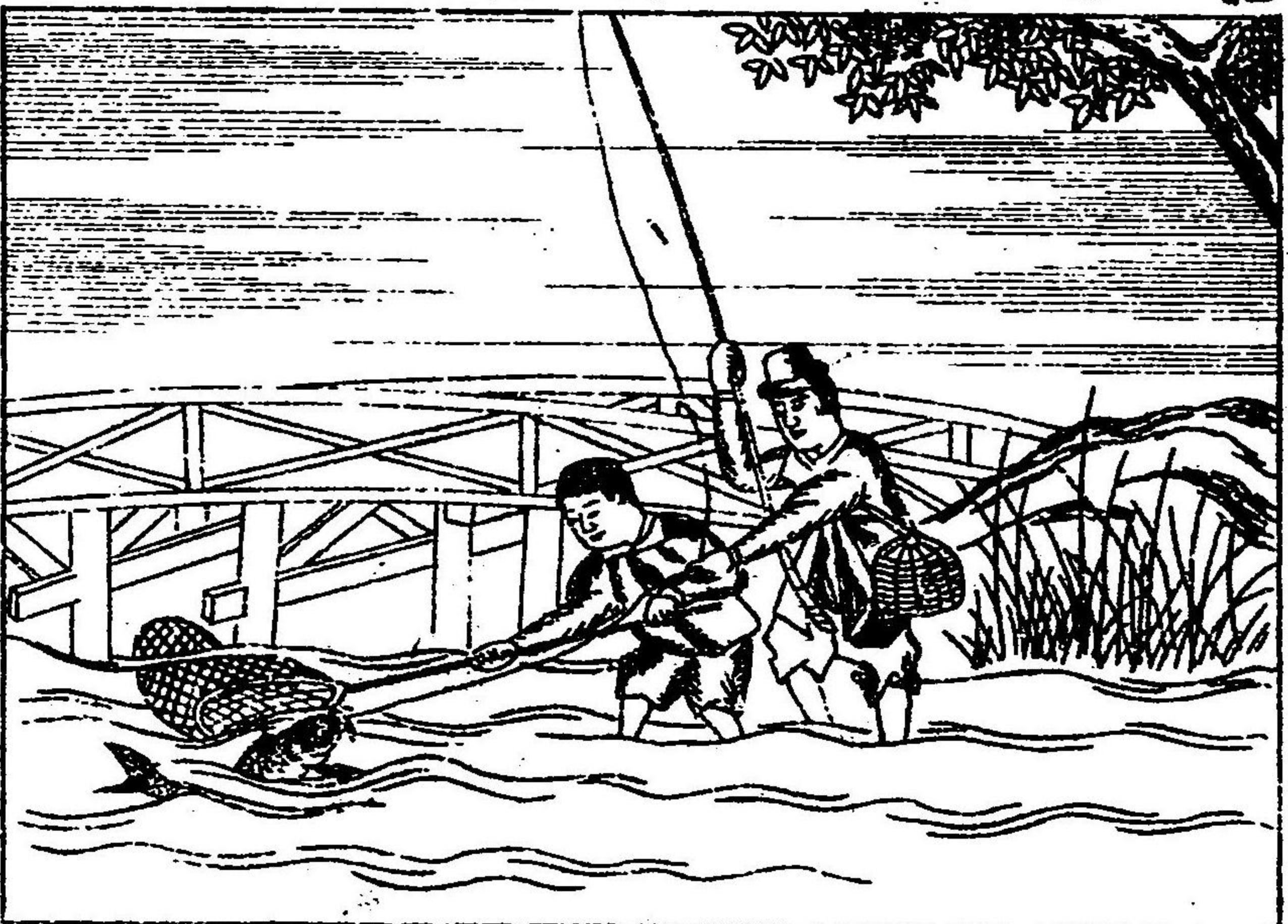


に其中、二本の長き角の先、目より短
 き角の下、口より ○此蟲は、冬、土の
 中、伏し春の至るを待ちて出づるを
 り汝も、此處に男兒と女兒と驢馬の在
 るを見たりや男兒は驢馬を来らんと
 〇何如と汝も、来り易かるべし、思ふ
 〇驢馬は、小さき馬なまど小兒
 〇造の向ひに荷車より ○汝は此荷
 車と何なりと思ふや ○遠き處に慥に見分くること
 能はざきども、畠の小路をゆらを見き、穀物と載せた

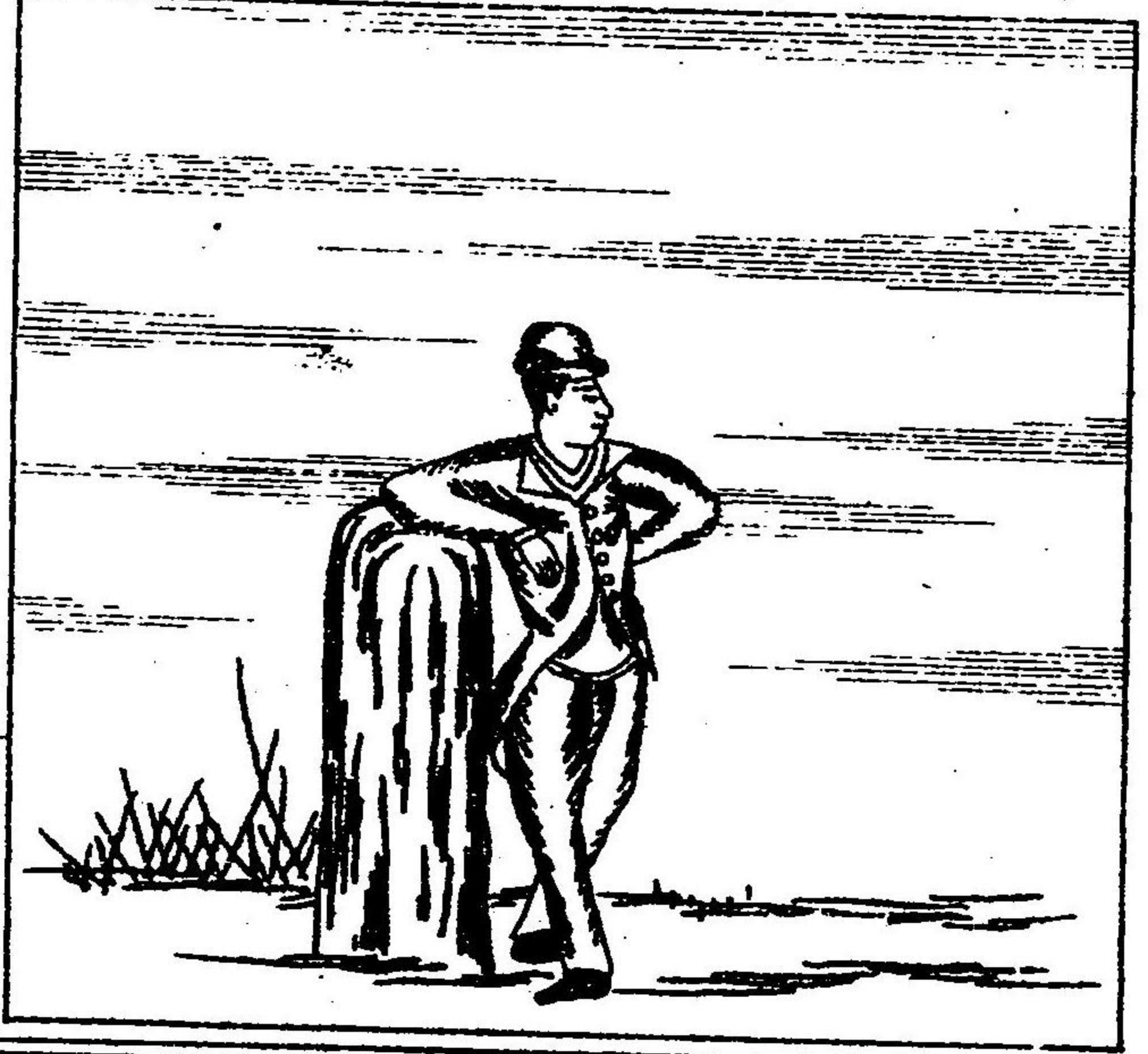
る車ならべし此圖を画きたるもの、何なりや ○大人
 と小兒と二人水中に立てり ○此等は何をなばや ○此
 人々の魚を漁するなり、大人の釣りたる魚は、大なりゆ
 る強く曳るべし、糸の切きんこ
 とを恐きて遠く曳き擧げざる
 なり ○男兒の持ちたるもの、し
 何なりと思ふや ○そき、網の
 類にて、たまとりふものなり ○
 男兒は、此網を以て魚を捕へん
 とに ○大人の脇懸けたるの



何をるそ ○こきへ蓋のあら籠
 くて其中に魚を入るなり ○
 此人の立ちをる處へ、深しと思
 ふる ○人の膝まで水に入らざ
 るを見まば甚深うらびもく深
 水なきバ二人とも立つこと能
 くらるべし ○此河に架くをる
 橋より汝へ此橋へ何くて造り
 せると思ふぞ ○橋に木と石
 と鐵との別へけきともこきへ木
 くて造りたる橋なり



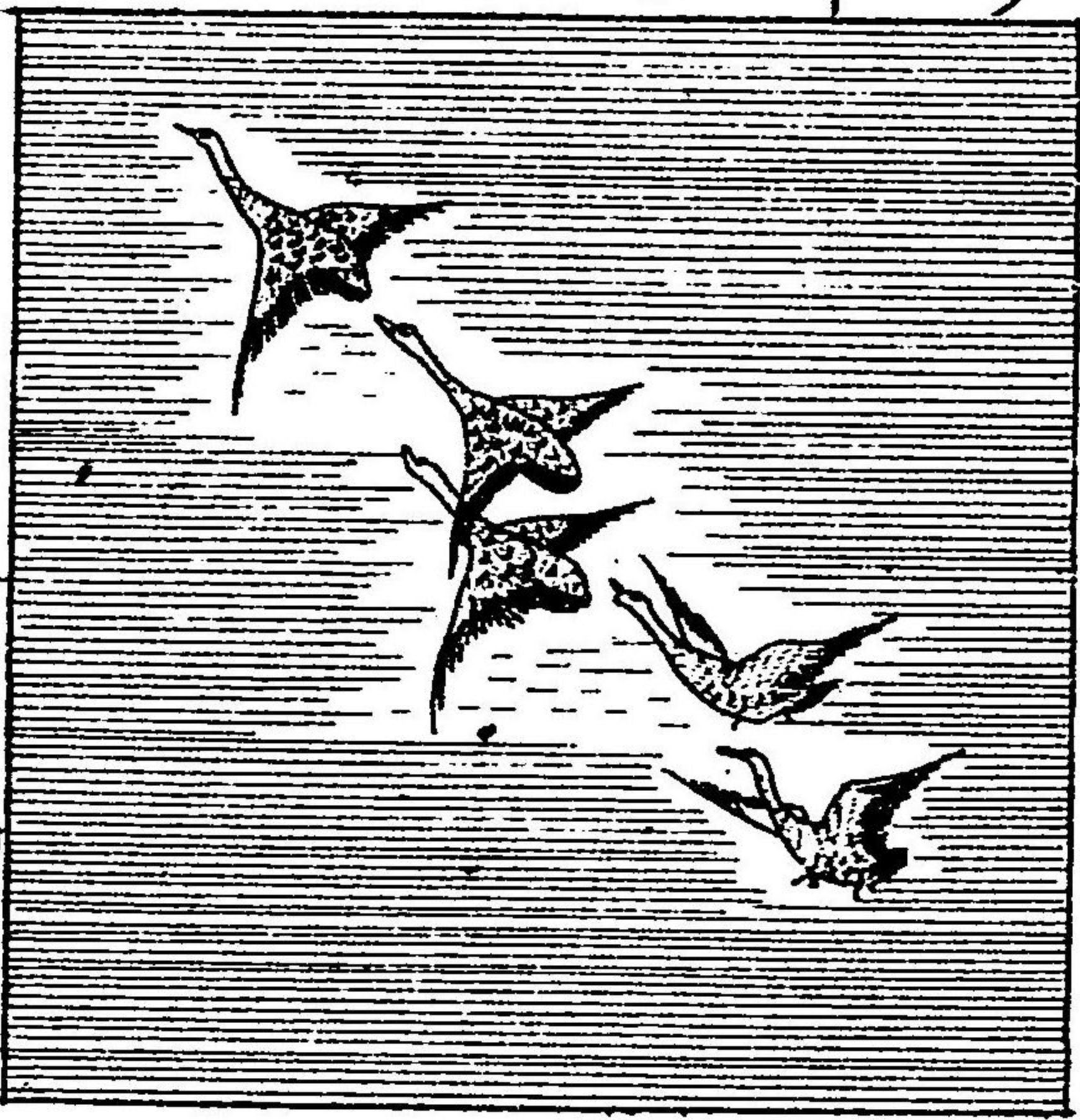
汝へ此男兒を何歳許なりと思ふや ○此男兒へ十歳以
 上なり ○此男兒へ、善き人なりと思ふる ○否學問をも
 せび又遊歩をもなきばくして、休むるゆゑも怠りもの
 と知らる也 ○此男兒へ何と
 寄りて何を見るや ○此男兒の
 寄りたるものへ大なる石の柱
 なり又此男兒へ何をも見ば只
 天をみるなり ○總て小兒
 くの、勤むべき時もあり遊ぶべ
 きと記もあり ○此小兒の如く



常に勉強をなさぬるときは成長の
後人より勝ることを得ざるなり
爰に又怠惰の小兒あり○彼は學
校へ行くと云ひしが何ゆゑに學
校へへ行かざりて途中に遊ば居
るや○未學校へ行くべき時刻来
りばや學校までへ既に誓古始ま
りをきば此小兒もとく行くべき
時刻なり○然らば何ゆゑ爰に止
まり居るや○彼は犬
を養ひ又他の怠りものと思へばなり○彼



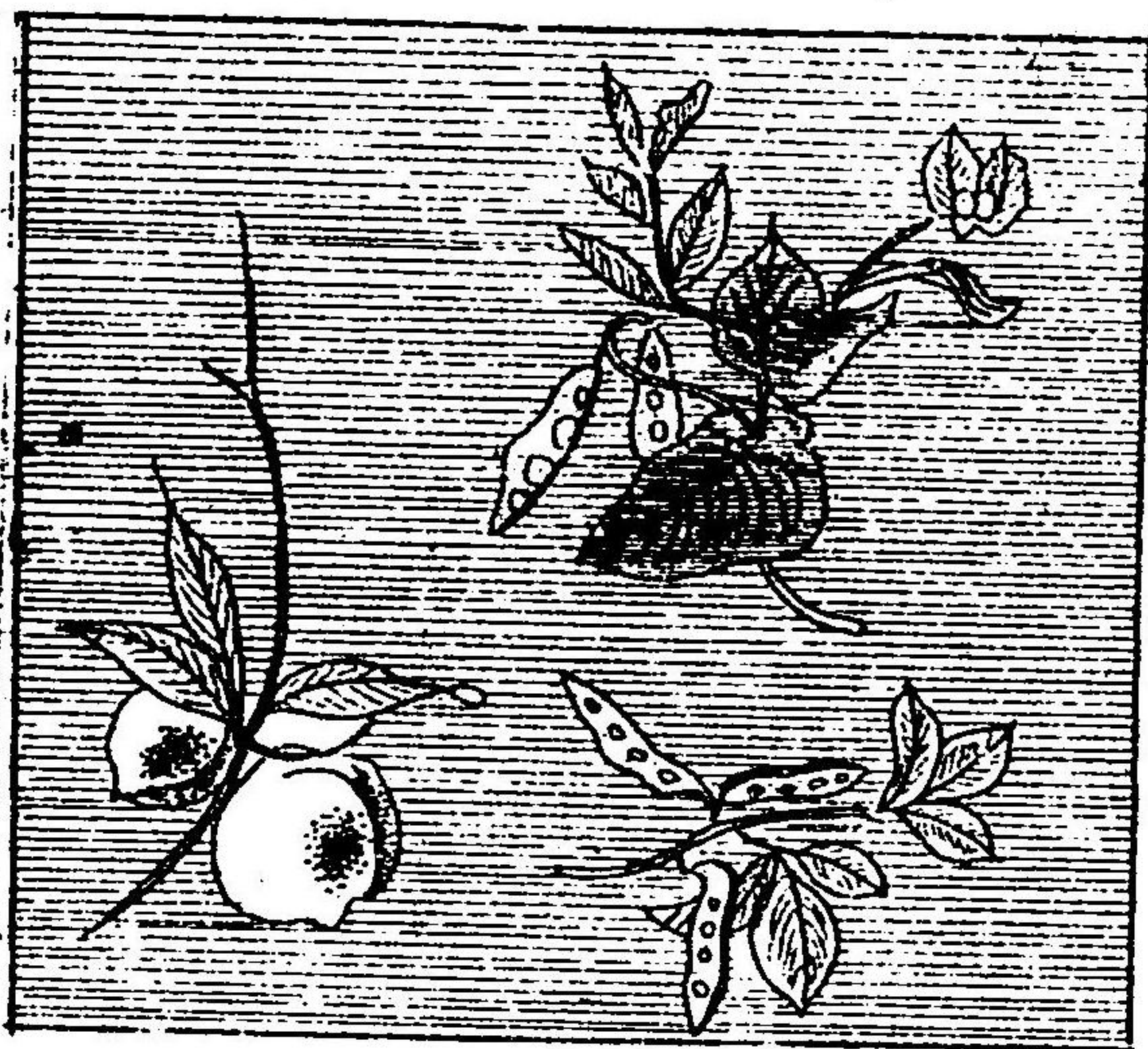
ハ學校より行くものありハ共書をハ何處に置きたるや
○書をバ自分の家より忘れたるあり○さきハ學校より行
きたりとも誓古をすることを得ば○善き小兒ハ書と大
切よふして學校より行くを好み
誓古の時間来きハ決して途中
よて遊ば居ることなく學校よ
ても能く勉強して學ぶゆゑに
其等級屢進むあり



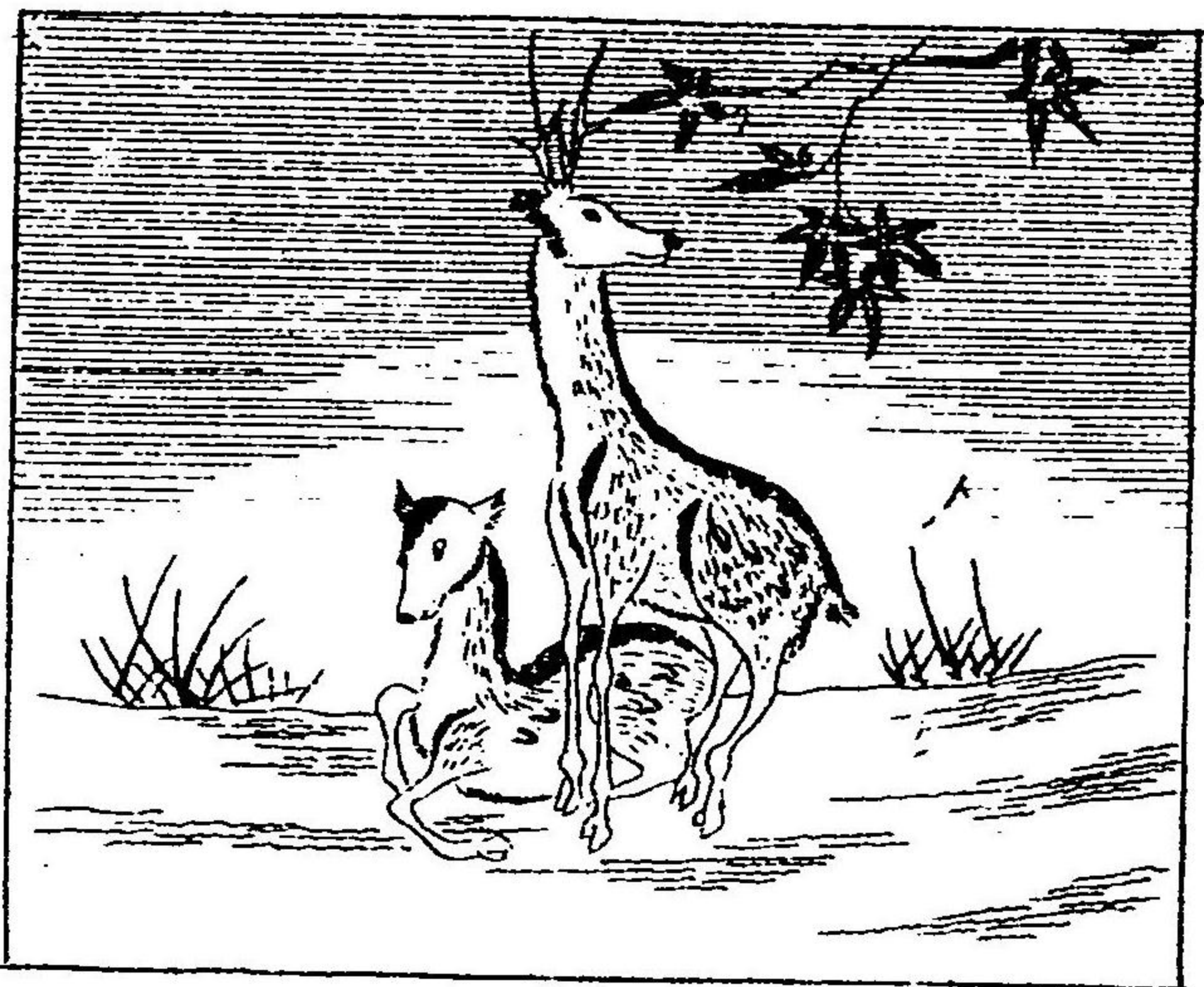
雁の列と成りて行く圖あり○見るべし一羽の雁導と

第三

○其莢を見て豌豆と蠶豆と知り穂の形を見て稻と
 麥とを知るべし草木は皆種子あり豌豆蠶豆ハ莢の
 中ま在りて梨李橙ハ肉の中ま在り○種子食物とふる
 ものハ稻麥豆黍粟のるゝあり肉の食物とふるものハ
 梅桃梨李蜜柑の類ふり草木ハ皆
 種子より生じ濕いたる土の中ま
 種子を置くときハ漸く膨脹して
 遂に破裂し其所より芽と根とを
 生じふるり礎ハ山林ま住する獸
 ありこの獸の牡ははたを生し



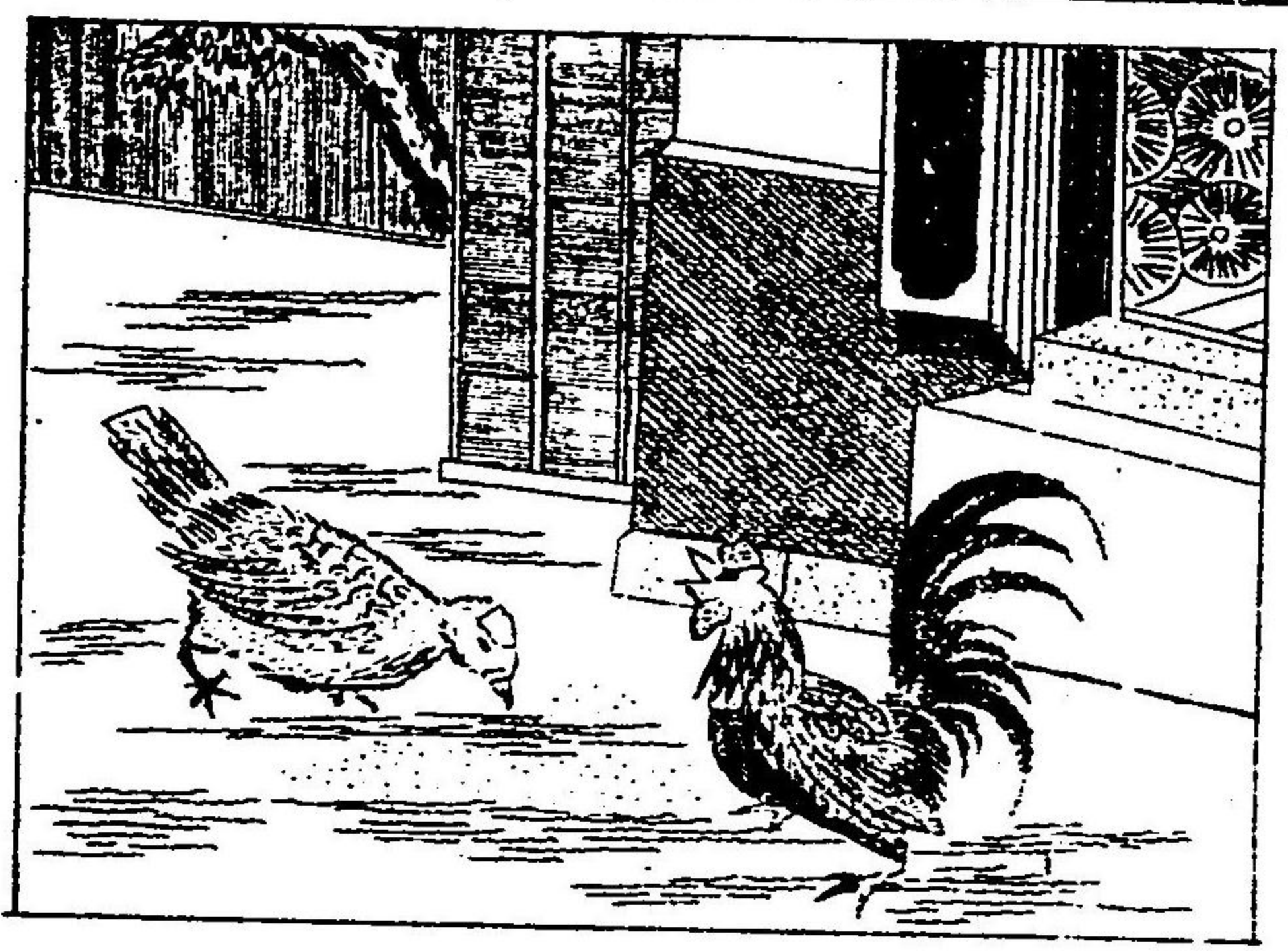
たる角あり牝はハ角ふし其色ハ茶褐色にして白き斑
 あり鹿ハ長き足ありて走ること甚速ふり○常く草木
 の葉を食し或ハ田野に來りて穀物を食することあり
 此獸の角ハ堅くして器に造る
 べく又其皮ハ席とふれべし此男
 兒ハ惡しき心のものふり汝ハこ
 の男兒の持てる帽の中にある物
 を見たるゝ○こまハ拵の實ふり
 ○此拵の實を垣を踰えて隣家よ
 り盗く取まるふり○今此男兒拵



の實と、盗と取り垣と踰えて、出で
 んとまゐる所と數多の犬ともごま
 と見て、男兎と追むらひ、一匹の犬、
 男兎の裾と咬へたり、よりて男兎
 へ垣と踰え去ることと得ば此時、
 盗きたる梯の實と捨てておべ、犬へ裾と放つべけきども、
 此男兎へ、ごまを捨つること能はば○他人の物と盗む
 へ決して、為まどきことなり、善き小兎へ、自分の物よ、ら
 らざきを取ることなり○常は行狀の正しきものへ幸
 多く正しうござるものへ、幸を得ること、能はざきば汝



等、他人のものをと見て何如あるものありとも必ごまを、
 得んことと欲することふうま、炭、四箇の雞と、穀倉と
 らり○汝が、見る所よてハ、ごまのとありや、○否、家の後

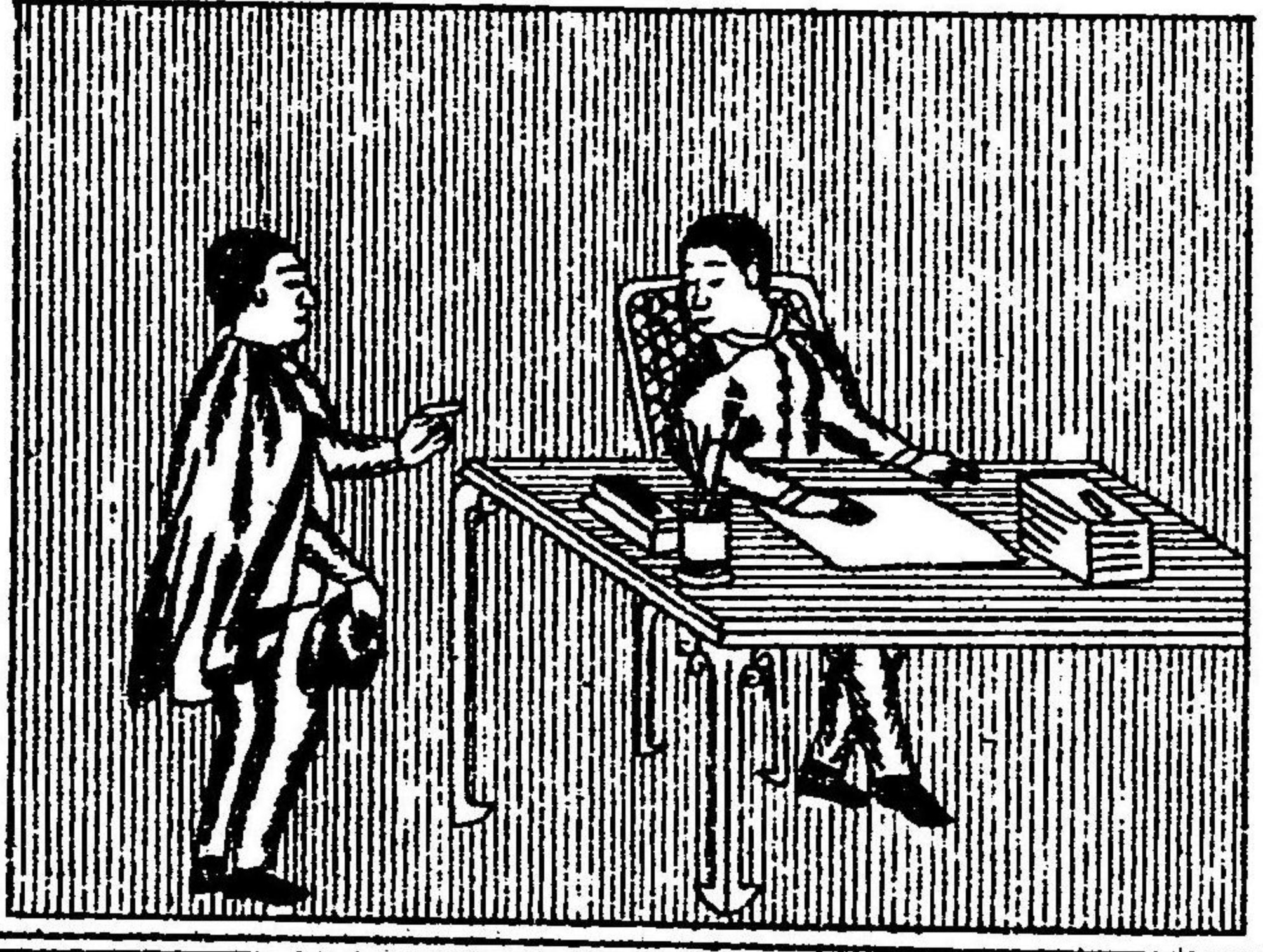


り、松らり、垣よ、寄せて、立てたる幕ら
 り、雞の飲水と、入またる水鉢らり○
 汝ハ、此鉢よ、水らりと思ふや必水ら
 りあるべし○何と以て、水のらると
 知まると○此鉢よ、少し傾きて、一邊の
 縁高く出でたるを以て水のらると
 知まると、水ハ、傾きたる鉢中も、決して斜

傾くことなく、其表面は必一様よ、
 平ふるものあり○汝ハ雞の水と
 飲むと見しや、雞ハ牛馬の如く、首
 と下げて飲むこと能はば、ゆえよ
 一瀝口よ入まば、首と擧げて咽よ、
 飲み下だすあり○此處ハ何如ふる所ありや○此處ハ穀
 倉の傍ふるべし、雞ハ巢に上らんとして、梯子と傳を行
 くあり○梯子に横木あり、こまハ何ありや、此横木ハ梯
 子の級あり、汝ハ雞の巢と見たるか○巢ハ隠きて、擔の
 うらよゆるゆを見ることと得ば、汝このところよ来ま



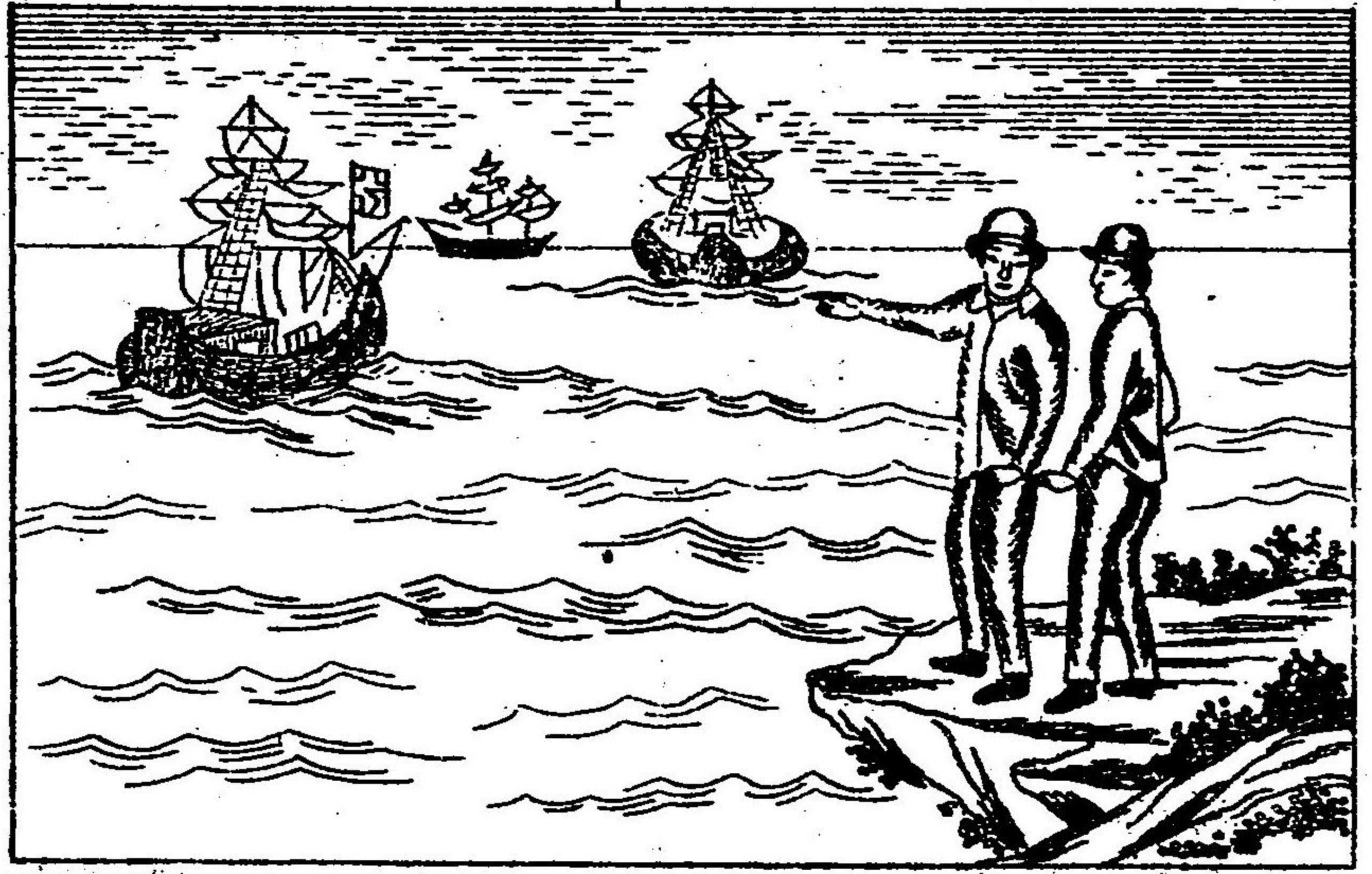
汝昨日矢をたる所の書籍を尋ね得たりや○否、未尋ね
 得ば○汝ハ文庫の中と、換し見ばや○幾度も換し見た
 きとも、其處はらば○汝今一度尋ね見し書籍をけま
 學ぶこと能はば、又汝ハ筆ありや○
 筆ハ命ぜらきたる如く、文庫の上
 置きたり○汝ハ筆の用るあたを
 知らばや○否、未用るあたを知らば○
 汝今其筆を取来き、汝ハ筆の用る方
 と教ふべし、ゆへの用るあたを知ら
 ばまば、字と習ふこと能はば、汝ハ○



今日學校へ行きたりや○學校へ
行き終日學びて、先刻歸り来たり
然らば座へ就きて、復讀せよ、凡て
學ぶる所を、常に復讀して、決
して忘るべからず

第四

岸の上へ二人の少年有て、三艘の
船の岸着くと見居たり○三艘共
帆を十分張て橋の上へ旗を
揚たる船也一人の少年云ふ我が
朋友へ、去年先の船へ



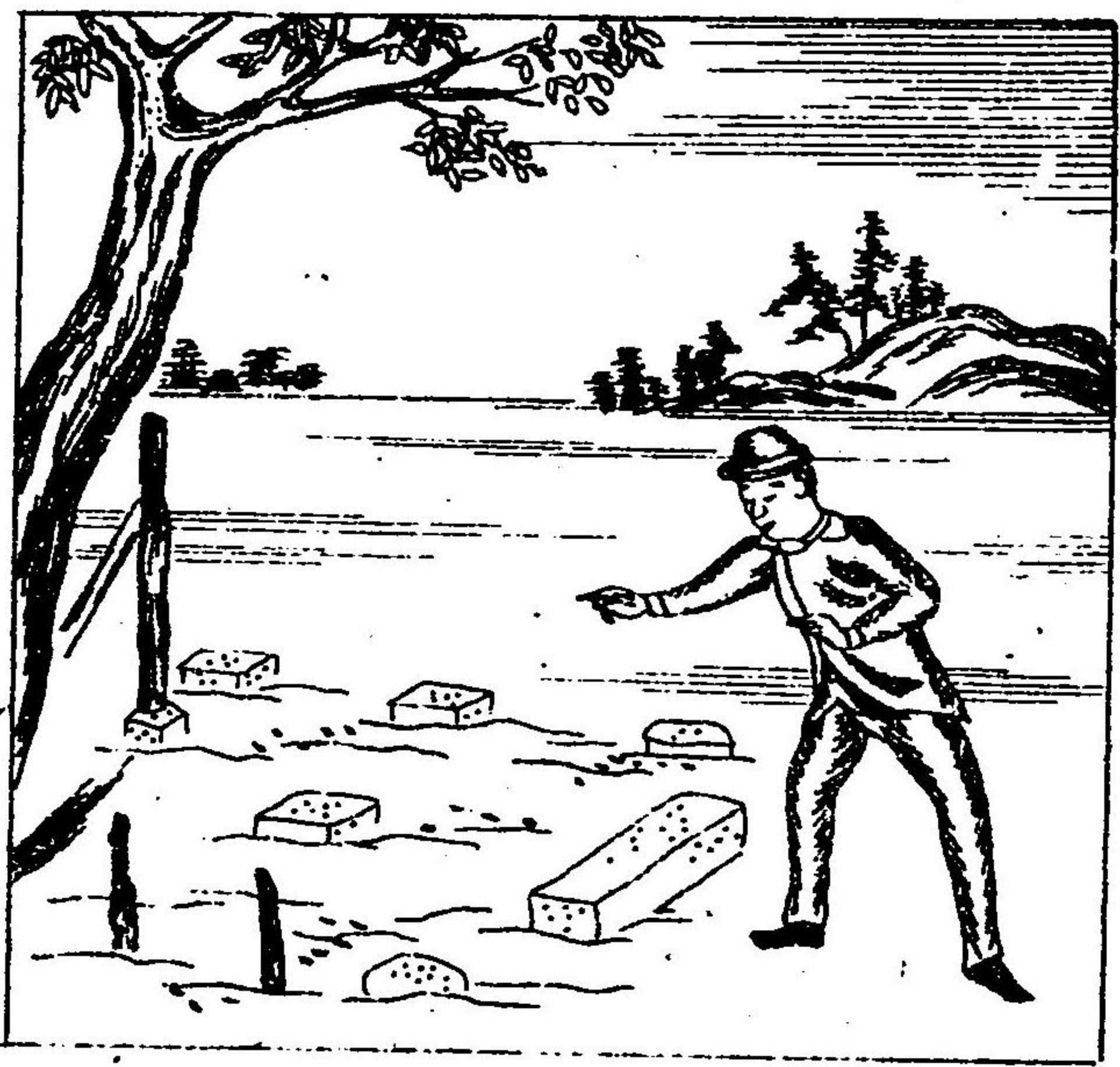
来りて、外國へ往きたり一日を數ふまば、其出立せし
日より今日まゝ殆一年及びて、歸り来たり彼の面親
し日々彼の歸るを待たり○今日無事なり續と見るこ
とを得て、何許の喜ばしうん、また、彼男も、父母の恙な
き顔と見へ定先て、大に喜ぶべし彼船へ堅固なる船と
て、風雨に逢ふとも破損なく無難に歸り来たり船中の
大々へ、昔此船を忝く思ふを、人々の外國へ行く
の學問或の貿易をなして我國の利益となさんことを
欲するがゆゑなり總寫し、嘴の長きものと短きものと
あり○此嘴より食物を啄む○鳥への穀物と食するも

のと魚又ハ、蟲を食するものとあり。○鳥の目ハ、面の兩側より見るゆゑ、一時ハ、兩方を見ることを得る也。○林中に遊ぶ鳥を、林禽といひ、水上に遊ぶ鳥を、水禽といふ。



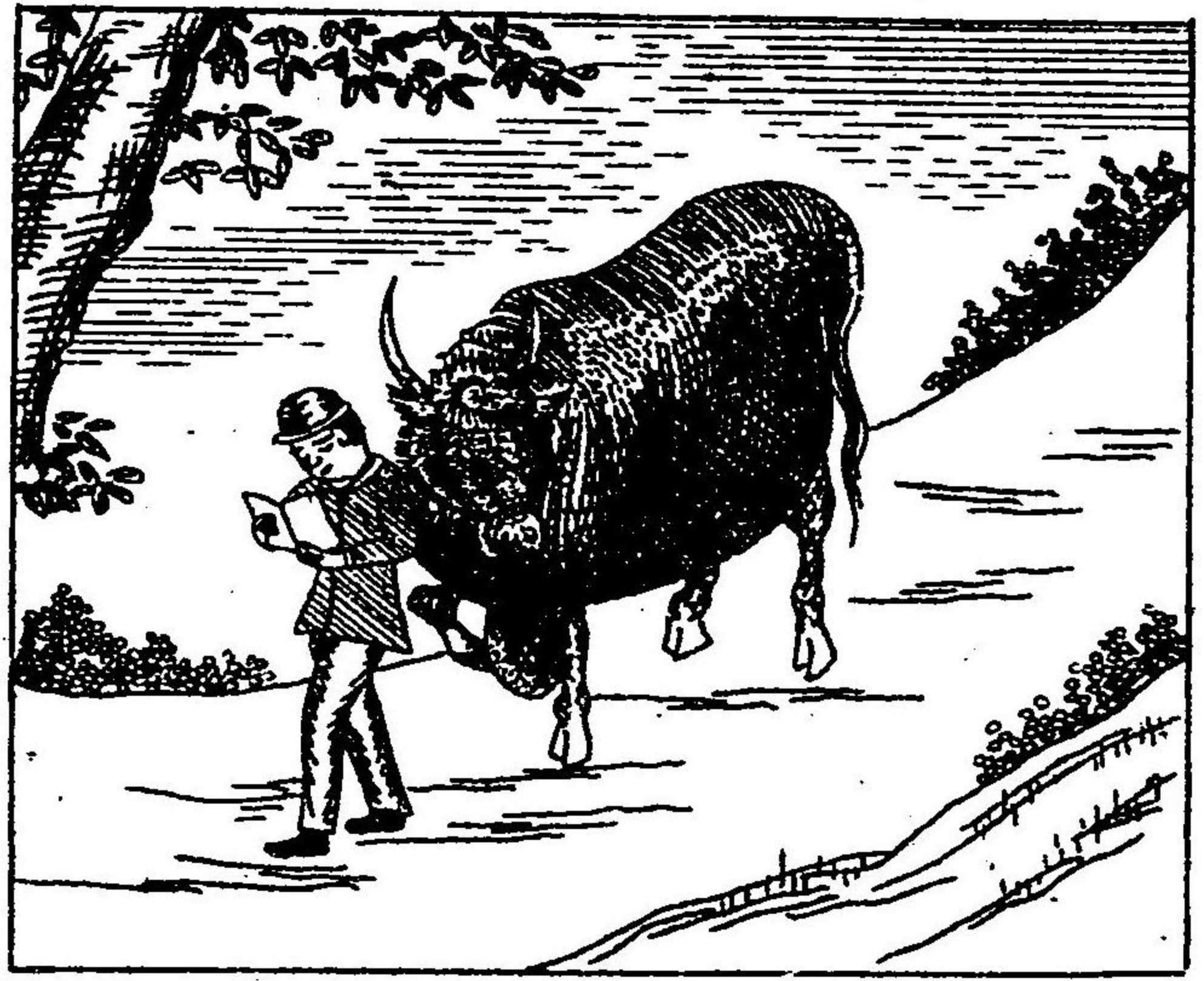
○鳥のつゝハ、四指ありて、三指の前一指の後より、然きども、啄木鳥類も、前後各二指ありて、能く大木に上下し、樹皮の中より住む蟲を捜し食す。此人ハ、驚きたる風情あり、是ハ、何故なりヤ。○何故なることを知らば、此人も、久しき以前より遠方より行き

て、今我郷に歸り来たるに、昔住みたりし家の變りたるを見て、驚けるあり、さて此家の、斯く變りたる所以を、詰り聞うに、此人の家を出でたる後、近隣に一人の小兜ありしが、此小兜ハ、至りて惡しきものにて、ある日、戯小紙を焼きて、遊へるゝ其火忽ち家の障子も燃えつき、終り此家まで焼け失せたり。○さきハ、今此人我家に歸り来りても、未だ妻子の行きたる所とも、知ること能はず。





ゆえに悲み歎くあり、今此人の家の焼けたる時の状と
 圖して示さん○火と烟との家の
 窓より吹出づる所を見よ○又家
 に懸けたる梯子あり○梯子の上
 りて火を消さんとする人あり○
 多くの人、唧筒よて頻り水を注
 げり、然まども火猶消えじして、家
 終り、焼け落ちたるゆえこの家の
 人々も皆逃げ去るあり、さまは
 小兒へ火を弄ふべううげ、一度過



つ時へ家とも倉とも失ひ甚しきに至りて、其身とも
 失ふことあるものあり、此圖は画きたるを柔和ある牛
 よして此小兒は隨を徐に歩めり、此小兒は、今牧場は牛
 と曳き行く所あり、○此小兒は、何
 ゆえに歩みあがり、書と讀むや此
 小兒は其性極めて賢く常は學問
 もることと好めども、家貧しきゆ
 えに、學校に入ることを能くばりて
 日々牧場は行くあり、然まども學
 間の志深きは因りて、道と行く間

も、書と讀むあり又牧場に至りても休む間へ、書を見ざることあり、○此の如き小兒へ、他日、必人よまさりて貴き人とあるべし、惡しき小兒へ、日々學校へ行くと雖能く勉強せざして、遊ぶらとのこと、好むゆゑ、後よへ愚ふる者とありて貧賤よ、其身を終るべし、雲雀、巢と麥、畠の間よ造りて雛を育てたり、○麥へ已よ熟して刈るべき時よ至りたるよ、雛へ、未自由よ、飛ぶこと能くは、一日親鳥、食と求めんとて、飛ぶ去り暮よ及ぶて、歸り来さば雛告げて今日、此畠主ふる農夫其子と共に来りて明日へ、近隣の人と雇むて此麥と刈り取らんとて、歸きりと云い

ふ親鳥聞きて彼近隣の人と雇むんとあはば未急よハ刈取るべし、明日ハ此處よありとも恐るしよ足らぬといひ共翌日亦食と求めんとて飛ひ去りたりかくて日の暮るし比親鳥歸り来き雛又告げて今日も農夫其子と共に来りしが近隣の人も同トく已う作りたる麥を刈ふに暇あはさきハ明日ハ朋友親族と頼みて刈取らんとて歸きりと云ふ親とりハ彼尚他人を頼むの心あはハ明



日も憂ふるよ足らぬと云へりさて其翌日親鳥例の如く
 飛去りて歸り来るよ雑の云ふ今日ハ農夫父子来りて
 うく麥の熱せるうへハ最早他人の力を待つよ暇あり
 ば明日ハ自刈り取るべしとて歸きりと云へり親とり
 ハこれを聞きて然らハ杖等も疾く此處を立ち去るべ
 し農夫ハ自刈り取らんと決したるうへハ必日と延を
 けべうふれといへりとそ親鳥の言實ハ理あり他人よ
 依りて事を成さんとする者ハ恐るしよ足らされとも
 自為さんと決する時ハ須臾も猶豫せざるべけれハか
 りされハ人々皆自ためさんことと志して他人の力を
 ハ頼むべうふれ

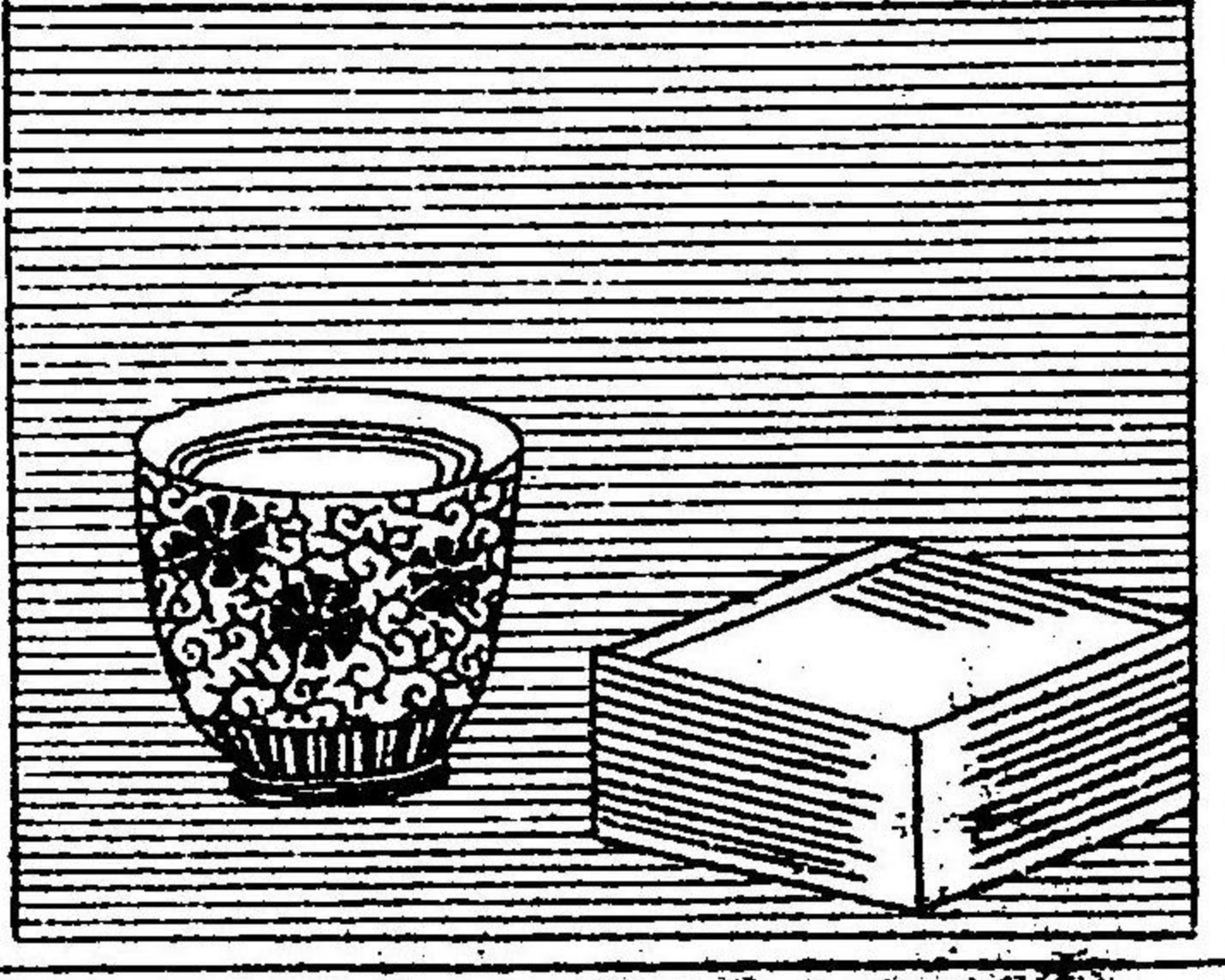
第五

今花園よ善き種子を蒔きて善き植物を生せしめ美
 きをふと開うしめんとするに園
 中よ蔓きる雑草と抜き取らるる
 ときハ蒔きたる種子と害して生
 長ぬること能をさらしむ今此と
 ころよ花園の雑草と抜き去る園
 と出だして以てこれと示さん地
 ハもとよきものふれとも善き



種子と蒔まつされハよき植物と生ト美うき花はなを閉しめて
 と能よむれ又芽既すマ萌出もでたるときハ能よく培つ養やうせさき
 ハ生長せいびること能よむれ難が草くさハこれマ死しして種子と蒔
 うさきども自生長じしこまを抜ぬき去すらざれば大おマ蔓まり
 て善よき植物と害がいし終つマこまを枯からし盡つれマ至いたるべし
 人の心ハもと善よきものふきども善よき教しと閉しきてこま
 マ従したがむされハ善よき人ひとと成なり難がし教師こうしの教しハ即すなは我われ心こころマ
 種子と蒔まくは同おなじ故ゆマ心こころと用もちてこまを育やしひ能よく成
 長ながせしむべし終つマと正ただの心こころの生なし易やすきこと難が草
 の如ごとくふきハ心こころマ蒔まきたる善よき種子と害がいすへき物を

効くわ先まてこまを抜ぬき去すらばハゆるべし
 にもしこまを抜ぬき去することを怠おろりて成
 長ながせしむるときハ終つマハ中なかマ萌もせ良よ良
 心こころを害がいしてこまを枯からし盡つれマ至いたるべ
 し汝なんぢ等ら善よき人ひととならんことを欲ほせば此
 人の雜ぞう草そうを抜ぬき去するが如ごとく効くわ先まて不正ふ正ただの心こころを抜ぬき去
 るべし爰こゝマ圓まるき器うつと四よ角かくなる器うつと入いきたる水みづあり
 とも水みづハ同おなじけきども其その器うつの形かたちマ由よりて或ある圓まるく或ある四
 角かくなる形かたちとなきり人ひとハ小免せうめんの時ときハ此この水みづの如ごとく善よき友
 マ交まじりて善よきことを見聞みきこけハ善よき人ひととなり又また悪わるき



友と交りて悪しきことのみを見聞けば悪しき人とな
 るなり家の内外に数多の小兒ありて其遊ぶべきの各
 異なるを見るべし家の内なる小兒は日々學校にて學
 びたる所を家へ歸りて其友と互に
 問答して、こきを樂とに、此等ハ他日
 必賢き人となるべく、又外に集まり
 遊べる小兒ハ學校でも行らざる者
 と見えて、犬を噛と合せ、棒を打揮り
 無益の遊のとなせり、此等ハ後日
 必愚なるものとなるべし汝等賢き

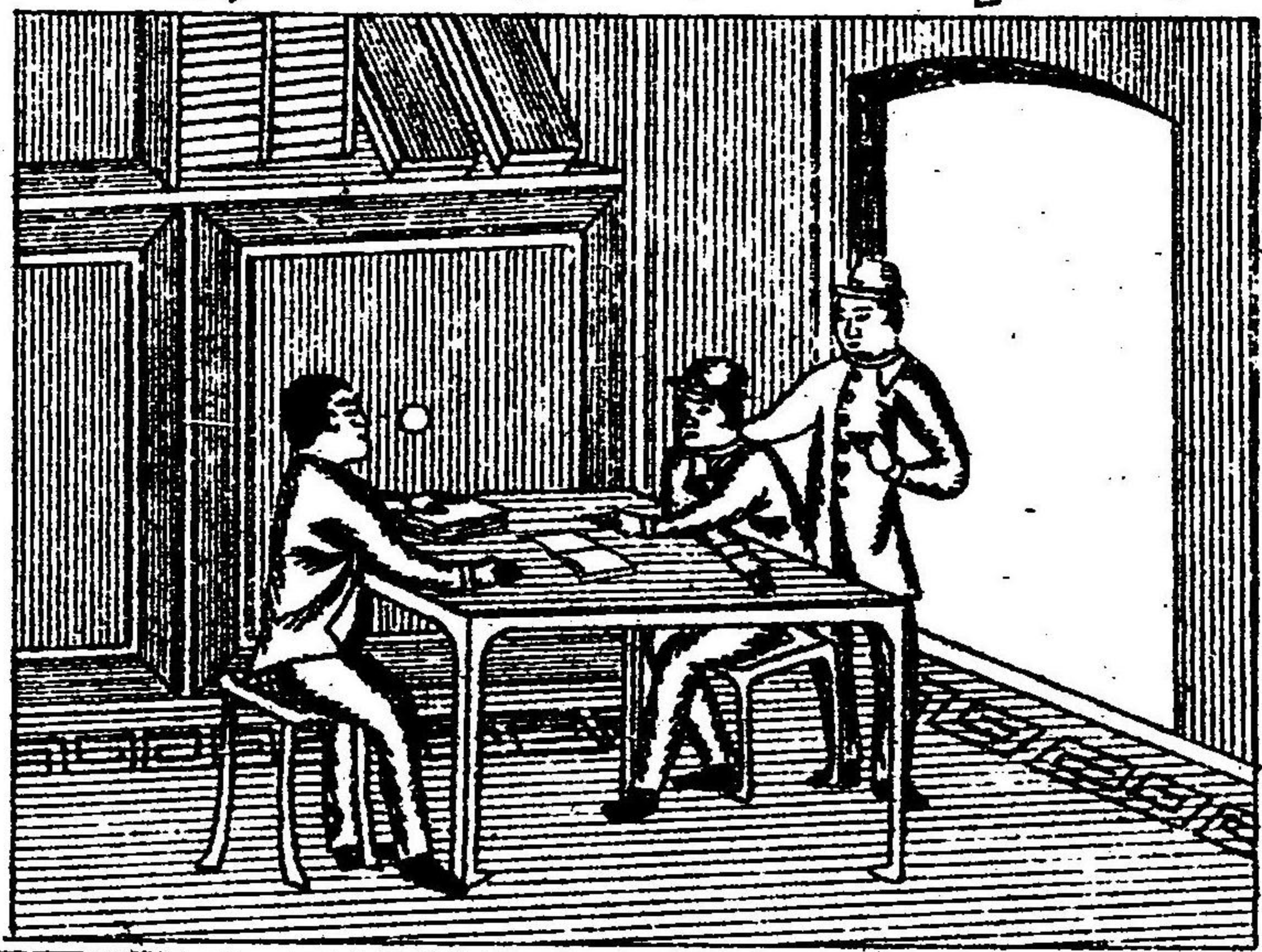


人とならんとおもふ能く心を用ゐて、常に善き友と交
 り必悪しき小兒等と遊ぶべし汝等事の正しき
 さるを知るときへたし、他日利あること、思ふとも
 決して行ふべし又、悪しき業をば、假しとも、心を行
 んことを思ふべし若し心を行ふんことを思ふとき
 へ縦令事へ出さばとも既に行ひたるも同じと知る
 べし凡て悪事ハ虚言より始まるものなり、さきハ暫其
 身ハ利益ありとも決して虚言にべし虚言を以て
 得たる利益ハ他人の物を盗きたると同じく、終るハ其
 身の害となるべし一人の男兒ありて毎々狼來

まきり狼來まきり誰う出て、救ひ
給へと、犬う呼びて途を走まきり
こまきへ、真う狼の來まきるうへ
らび他人の、出來りて救むんと
そるときう欺き得たりとて、太
く其人を笑ふを以て戯とそる
なり斯くそること度々なり
がゆる日真う、狼來りて此男兒
を食しんとは男兒へ大う呼びて、狼來まきり救む給へと
いへども誰も亦例の虚言なるべくとてこまきを救ふも



のなりのゆい系終う、狼のた先う噬う殺さきをたり故う
平生戯うも虚言を以て人を欺くものへ、適真實のこと
を、話をもとも信となにもの、ゆらざ
まきば常う慎むべきことなりばや
此處を、何如なる家なりと思ふぞ
○こまきへ、書肆なり、矣う、三人の男
ゆり帽を戴きたる、二人の者へ書
籍を買もんがた先う、此處う來ま
るなり、一人へ既う一冊の書と購
む得て、去らんとは一人も机上の



書の價を定先居るなり、今此二人の書籍を買ふ何の
 為なりや、家歸りて、こきを理會く巴の知識を増さん
 とにきばなり、書をけきば智職を増くこと能もに智職
 無きときバ國の利益を興にこと能もに故、志向る者
 へ、有用の書を、金を惜まばりて、こきを購ふなり此圖
 の男へ、手く持てる、書を読みて、其義を小兒に語り聞
 くむる、所なり○汝この小兒に能く心を用ゐて、其話を
 聞くと思ふら○此小兒に心を用ゐて、其話を聞くと見
 え、此男の、語ることを深く考ふるさまなり、思ふら、今
 聞く所へ、此書の中の、尤大切なる箇條なるべし○凡て



教を人く受る者へ、決して倦怠の心
 を生じべし、其に倦怠の心を生むら
 とき、直く、其顔色を見ら、其
 教ふる者も、亦こきを知りて、懇
 教訓にることな、さき、教を受る
 者へ、皆此小兒の如く心を用ゐて、其
 話を能く考ふべきことなり

第六

汝へ猫の兒を愛はるら、又犬の兒を愛はるら○我へ猫
 ても、犬も、其遊び戯るる所を見ら、こきをこの見ら

總て、獸類も推き時へ、小兒の如く遊ば戯るゝことを好むそのなり、中々も、猫の兒へ、繩又ハ鞠を弄びて、能く戯き遊ぶなり。○然きども、獸類も、年老ゆきむ、遊ば戯ることとを、好まば人より、年長けをり、後まで、遊ば戯るゝバ、耻ばべきことと、うらむバヤ。○さきバ、老たる猫も、其兒の戯き遊ぶを見ることとを、好免ども、其身に觸るゝこととを、喜ばざるなり。○老人も、小兒の遊ぶを見ることとを、好免ども、其身に觸るゝこととを、喜ばざるものゆへ

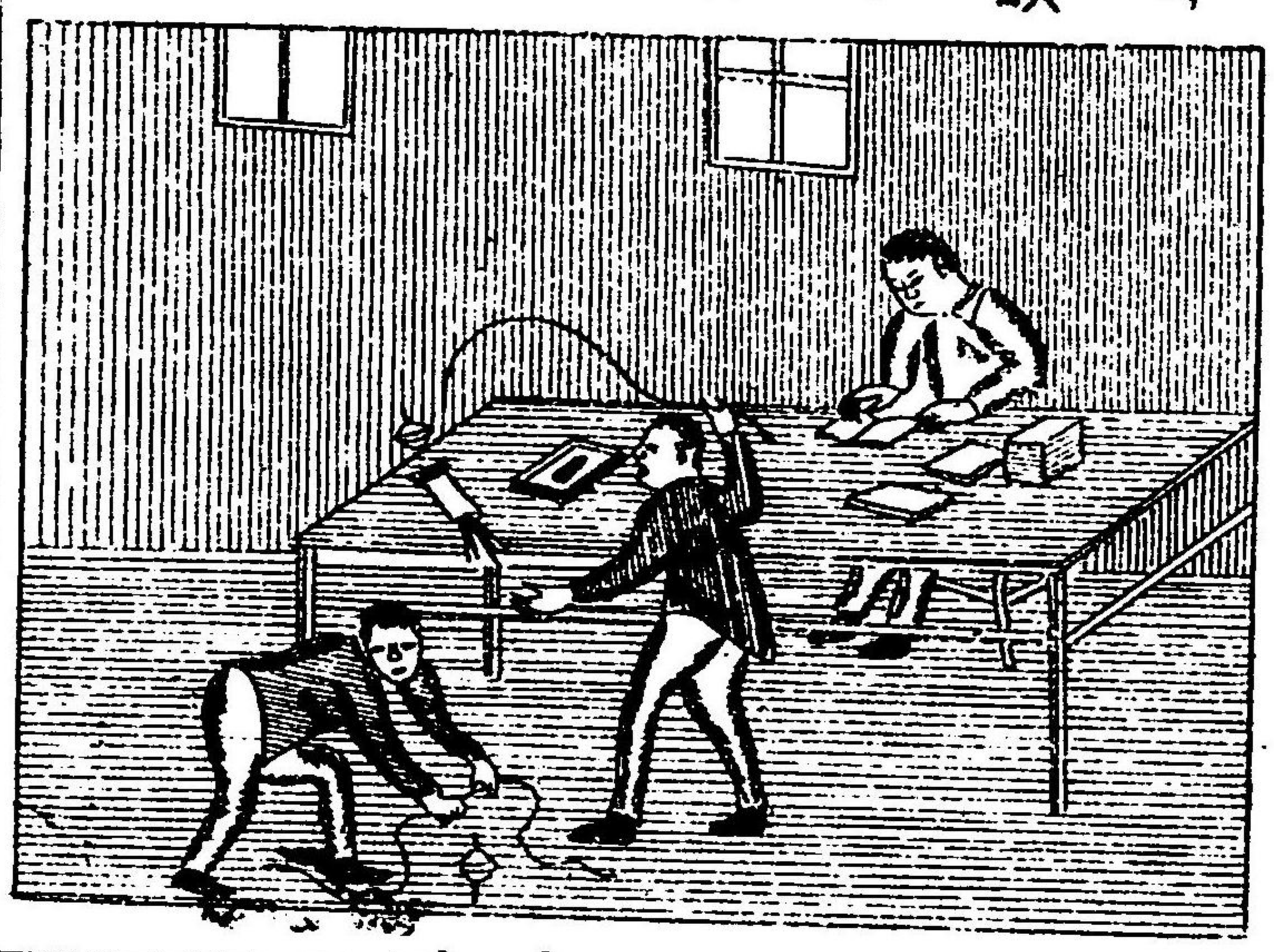


小兒ハ遊ば戯るゝとも、老人の身ハ觸き又ハ其椅子扨ふとよハ決して手と着くべう。此小兒ハ學校にて善き生徒なり。○汝ハ此小兒の學校にて書と讀むと聞きたりや。○此頃始めて書と開きたり此小兒ハ何の書と讀めるや。○彼ハ小學讀本讀めり。○其讀む所の小學讀本ハ何の巻なり。○彼ハ卷の三と讀めり。我ハこの小兒の如く能く書と讀むものと好む能く書と讀むものハ後ハ善き人とふまハあり。○若く問ふく智慧もふ



小兒ハ遊ば戯るゝとも、老人の身ハ觸き又ハ其椅子扨ふとよハ決して手と着くべう。此小兒ハ學校にて善き生徒なり。○汝ハ此小兒の學校にて書と讀むと聞きたりや。○此頃始めて書と開きたり此小兒ハ何の書と讀めるや。○彼ハ小學讀本讀めり。○其讀む所の小學讀本ハ何の巻なり。○彼ハ卷の三と讀めり。我ハこの小兒の如く能く書と讀むものと好む能く書と讀むものハ後ハ善き人とふまハあり。○若く問ふく智慧もふ

くはいかであらき人とあふことと得べき善き人とあ
 ることと得べき他人と愛せしむることとあふ又貴
 なることとあふ三人の小
 鬼あり一人ハ机に向ひて書と讀
 み二人ハ獨樂と廻ハリて遊べり
 獨樂と廻ハリて跳り旋るゆゑハ
 机ハ觸きて其上の筆筒を倒せり
 書と讀そ居たる小兒の心ハ此
 二人の戯き遊ぶと何如ハ騒さわがし
 く思ひ居るあしん定めて此小兒



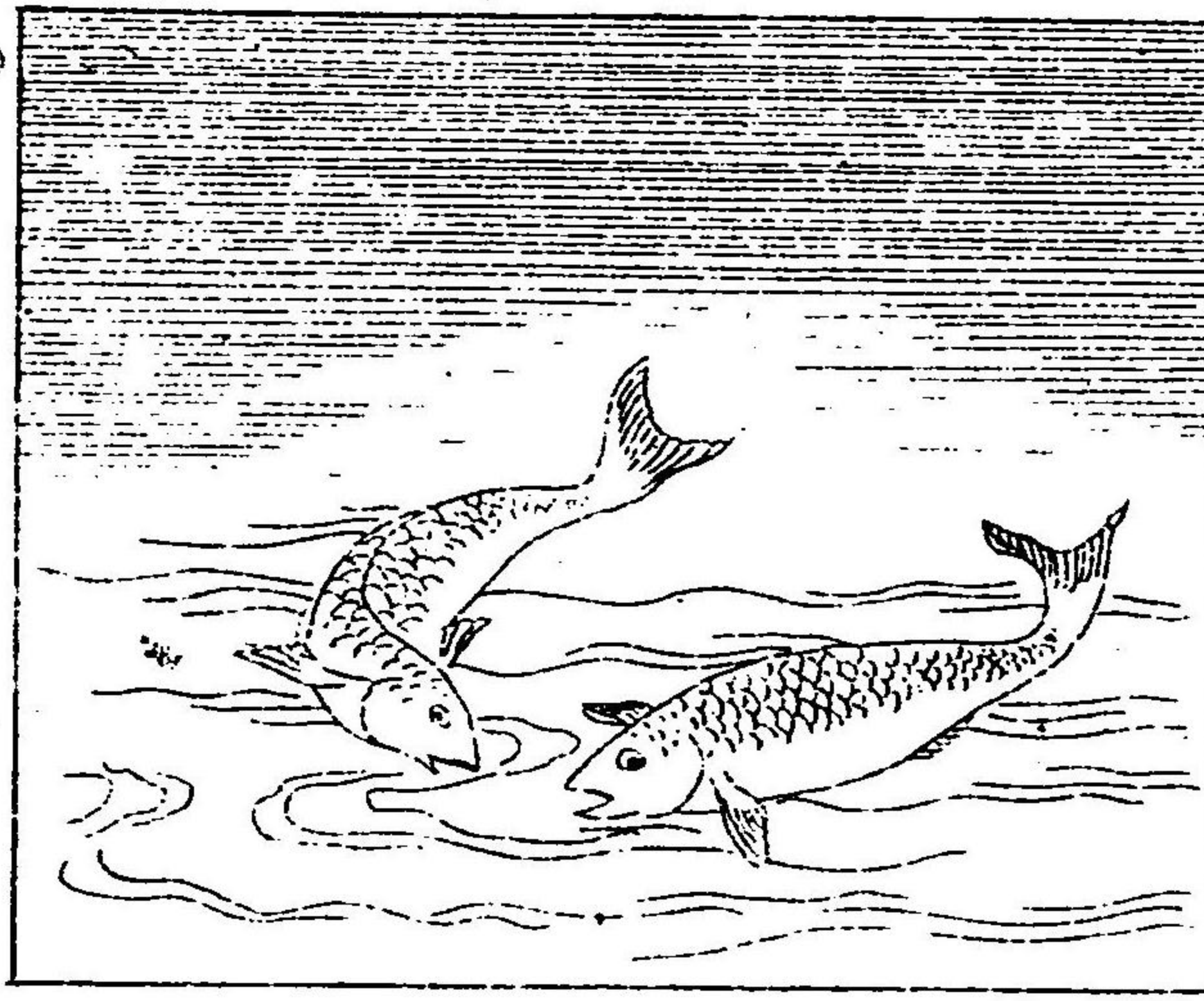
等の他處へ行かんことを願ふるべし總て人ハ自好ま
 ざることをバ人ハ亦好まざるものと思ひ遊ひ戯る
 にも決けつして人の妨さまたとあふべきことをあはれべし又



自好むことハ人ハ亦好むもの
 知りてこそまづ人ハ譲るべし
 されハ古き教へよも己の欲せさ
 る所ハ人ハ施ほくことあふまとい
 ひ又己達せんと欲せば人と達せ
 しめよとも云べり爰こゝよあそ歩に
 出でんとけり小鬼あり○汝ハ此

小兎の善きと悪きとを知らずや○我ハ本其人と
 知らずと雖今遊歩に出んとするに其母ヲ呼ビ返
 さま速ニ歸リ来リ否む色なきと見まハ善きものなる
 べし其母ヲ呼ビ返さまてこれと厭ふ心の色ヲ見
 ハるゝも心善きものなりと知るべし此小兎ハ未
 學校ヲ入らざるか○此小兎ハ五六歳ヲ過き後と見ゆ
 きバ未學校ヲ入らざるべし我ハ此小兎、學校ヲ入り
 ても遊歩のいと好まけりて勉めて書ヲ讀み成長の後
 その善き人たるを失ハさしんことを願ふなり此圖ヲ
 画けるハふれものなりや○こまハさうふなり汝ハ生

きたる魚と見たるべし○常ニこまと見る、汝ハ漁せし
 ことらるべし何と以て漁せしや○釣と糸とを以て、魚
 と釣しことらり、魚ハ水中ニ住むものゆえ、水と離る



々ときハ其命を保つこと能らば
 ○魚ハ鱗と尾を以て、自由ニ水
 中ニ游泳し、又全身ニ鱗あり、
 鱗なきらり、其鱗も魚よりて、大
 小と異り、汝ハ魚の水中ニ居
 るときも其目ハよく物と見ると、
 思ふか○然り、水中ニ居てもよく物

と見るなり○何と以て水中よても能く物と見るらと
 と、知するや○も、水中よて物と見ること、能へざる時
 へ、必^{ガシキ}岩石よ衝^ツき當^タりて頭^{カシ}と傷^キくべし然らざるそのも、
 よく物と見ることと得^トきへなり、人ハ、水中よて物と見
 こと、分明^{ブンメイ}あらずば、魚^{イサ}水中よても甚^タ分明^{ブンメイ}なり、そき、魚の水
 中よて、能く物と見るへ、其^シ目^メ、人と同^トううづきべあり、
 魚へ、水中よ住^ス、人へ、空^{クウ}氣^キ中^{チュウ}に、住^スむゆえよ、人の、空^{クウ}氣^キ中^{チュウ}
 りて、能^クく物と見るへ、魚の水^{スイ}中^{チュウ}よて、能^クく物と見るよ同^ト
 今、この男^{オトコ}兒^コの家^イと辭^シして遠^{トウ}行^{キョウ}せんとし、戸^ドまへの階^{カイ}
 と降^クりたるゆえ、その妹^{イモ}も階^{カイ}と降^クりて、さきと送^{オク}り別^ワる

臨^{リン}きて互^ニよ、言^{コト}と贈^{オク}答^{コタ}をもる所^{トコロ}あり
 兄^{ケイ}曰^ク、汝^ニ慎^{シム}みて、家^イと守^モり、能^クく、其^{ソノ}身^ミ
 と保^ホつべし、火^ヒと過^スつことふかき、
 病^{ヤミ}と生^ナまるとことふかきと○妹^{イモ}ハ、
 吾^ガ兄^{ケイ}、寒^{サムイ}暑^{アツク}と犯^オまへり、久^{キウ}く、
 く、他^タ郷^{キョウ}に止^トまるべし、と云^クふ
 兄^{ケイ}又^{マタ}云^クふ、予^カ彼^カ郷^{キョウ}に到^キらば、速^スに書^{シヨ}
 と以^ヒて安^{ヤシ}否^ヒと報^ハをへし、汝^ニも亦^{マタ}其^{ソノ}安^{ヤシ}否^ヒと報^ハせよ、予^カ他^タ
 郷^{キョウ}に在^アる間^マハ、只^タ汝^ニの消^{キョウ}息^{シツ}と得^トるを以^ヒて樂^{タシ}とふべし、
 のみ汝^ニ等^ト此^{コノ}二^ニ人^ニを何^{ナニ}如^ニあするものと思^{オモ}ふや○こまを同^{ドウ}



胞の孤ふり孤とハ幼稚のときハ兩親を喪ひたるもの
 とりふ此二人早く兩親を喪ひたるゆゑ今自身を立
 てんとけるふり今この男子ハ遠方へ行き幾年妹と
 相見ることと得れば文字と知まりゆゑ互ハ書簡
 と贈答して其安否と審よれることと得べし此二
 人文字と知らば何ハ因りて音信と通はることを
 得べき汝等此二人の事を見て能く文字と習ひ勉めて
 書簡と作ることを學ぶべきふりむうりある家ハ兄弟
 の小兒あり兄ハ七歳にして弟ハ五歳なり○兄ハ其才
 最敏にして心も亦優しきものふり弟も良き性質ふま



ども尚幼きゆゑ未世間の一を知ら
 ば輒もなきを過りたる舉動をなすに
 ことありある日兄弟とも郊外に
 出で遊べるるある家の籬に小鳥
 の巢有親鳥ハ人の来るに驚きて飛
 び去りたり兄弟ハ巢の中を窺ひ見
 るに雛三羽あり弟ハ悦びて雛を取
 りて持ち歸らんとりふを兄ハとま
 を愛はるも父母の我等を愛し給ふる同く今汝この雛
 を取り去らば親鳥の悲何如ならんも我が家に入り来

りて我等兄弟を捕へ去るものゆらば、父母の悲く給ふ
こと幾ならんましてや、雛も親鳥の養ふ由りて生長に
るものまして、今人の手まうりなれば、決して育つこと
ゆらべゆらびさきば、今この雛を取らざるこそよけき
と諭しけまば、弟も其理を服して、兄の教を隨ひたり。此
弟の鳥の雛を取らんとは、殺生もるこそ非きども
其理を論むまじむの如く、まして、無益に殺生もるを
やまきむ。縦たゞ小ちきこ蟲むしとりとも無益に殺しへゆらば、世の
理を知らざる者へ、小き蟲を殺しを以て些細の事とせ
り、實に些細の事、以たりと雖、まきを殺さんと思ふ心

し即些細の事、ゆらば、この心既に慈悲を失ひたるな
り。慈悲を失ひたる心、漸長むるに至らば、畜類を殺
すの心を終るべし。人を殺すの大悪も、陷るべし。豈
恐まざるべけんや。故に殺生を誠むるは、慈善の人とな
るべき階にして、終る類まきなる善人ともなり、身の
幸福を得るに至るべし。

明治九年十二月十八日御届建費十錢

出版人 山中常七

東京 山中市兵衛

山中北郎

書林 山中孝之助

